

靈魂第十号の秘密

海野十三

青空文庫

でんぱごや
電波小屋 「波動館」
はどうかん

みなさんと同じように、いちはた「畑少年も熱心な電波アマチュアだ
つた。

少年は、来年は高校の試験を受けなくてはならないのだが、その準備はそつちのけにして、受信機などの設計と組立と、そして受信とに熱中している。

彼は、庭のかたすみにも、そのための小屋を持っている。その小屋の中に、彼の小工場があり、そうじゆしんじよ送受信所があり、図書室があ

った。もちろん電源も特別にこの小屋にはいつていた。この小屋を彼は「波動館^{はどうかん}」と名づけていた。

このような設備のととのつた無線小屋を、どの電波アマチュアも持つというわけにはいかないだろう。

一畑少年の場合は、お母さんにうんとねだつてしまつて、このりつぱな「波動館」を作りあげてしまつたのだ。

お母さんは、ひとり子の隆夫^{たかお}少年に昔から甘くもあつたが、また隆夫少年ひとり^{あま}をたよりに、さびしく暮して行かねばならない気の毒な婦人でもあつた。

というのは、隆夫少年の父親である一畑^{いち はた はる あき}治明博士は、ヨーロッパの戦乱地でその消^{しょうそく}息をたち、このところ四力年にわた

って行方不明のままているのだ。あらゆる手はつくしたが、治明博士の噂のかけらも、はいらなかつた。もうあきらめた方がいいだろうという親るいの数がだんだんふえて来た。心細さの中に、隆夫の母親は、隆夫少年ひとり^ををたよりにしているのだ。

なお、治明博士は生物学者だつた。日本にはない藻類^{もるい}を採取研究のためにヨーロッパを歩いて^{てつか}いるうちに、鉄火の雨にうたれてしまったものらしい。

博士の細胞から発生した——というと、へんない方だが——その子、隆夫は、やはり父親に似て、小さいときから自然科学に對して深い興味を持っていた。そしてそれがこの二三年、もつぱら電波に集中しているのだつた。

隆夫は、学校から帰つてくると、あとの時間を出来るだけ多く、この小屋で送った。

夜ふけになつても小屋から出て来ないことがあつた。また、「お母さん、今夜は重要なアマチュア通信がありますから、ぼくは小屋で寝ますよ」などと、手製の電話機でかけてくることもあつた。

この小屋には、同じ組の二宮君にのみやと三木君みきが一番よく遊びに来た。この二人も、そうとうなアマチュアであつた。

隆夫の方はほとんどこの小屋から出なかつた。友だちのところおとすを訪れることも、まれであつた。

そのような一畑少年が、この間から一生けんめいに組立を急い

でいる器械があつた。それは彼の考えで設計したセンチメートル電波の送受信装置であつた。

この装置の特長は、雑音がほとんど完全にとれる結果、受信の明瞭度めいりょうどがひじょうに改善され、その結果感度が一千倍ないし三千倍良くなつたように感ずるはずのものだつた。

その外にも特長があつたが、ここではいちいち述べないことにする。

その受信機は組立てられると、小屋の中にある金網かなあみで仕切つた。奥の方に据すえられたあらい金網が、天井から床まで張りつばなしになっているのだ。その横の方が、戸のようにあく、そこから中へはいれる。その仕切りの中の奥に台がある。その上に例の

受信機は据えられた。送信機の方は、もつとあとにならないと組上がらない。

パネルは、金網の上に取付けてあつた。受信機とパネルの間には、長い軸じくが渡されてあつた。金網の外で、パネルの上の目盛めもりば盤ばんをまわすと、その長い軸がまわつて、受信機の可動部品を動かすのである。

金網はもちろんよく接地せつちしてある。だからパネルの前に人間が近づいて、目盛盤をまわしても、受信回路の同調を破つたり、ストレー・フィールドを作つて増幅回路へ妨害を与えたりすることはない。この金網は、じつは天井も床も四方の壁をも取り囲んでいて、つまり受信機は大きな金網の箱の中に据えられているわけ

だ。これほど念を入れてやらないと、波長がわずかに何センチメートルというような短い電波を、純粹にあつかうことはできないのだ。

隆夫は、自分の受信機が、非常にすぐれていると信じていた。これが働きだしたら、ひよつとすると火星などから発信されている電波を受けることもできるのではないかとさえ考えていた。

もちろん彼は、火星だけをあてにしているわけではなかった。最近の観測によると、火星には植物でもずっと下等な地衣類がはえているだけで、動物はまずいないのであろうといわれる。つまり火星人なんて棲^すんでいないらしいというのだ。

しかし宇宙は広大である。直径十億光年の大宇宙の中には、地

球と似た遊ゆうせい星も相当たくさんあるにちがいないし、従つてその住民がやはり電波通信を行つてゐるだろうし、そうだとすればその通信をとらえる可能性はあるはずだと考えていた。

そしてあと二十年もすれば、われわれ人類はいよいよ宇宙旅行に手をつけるだろうが、それにはロケットをとばすよりも先に、電波をとばし、また相手から発射される電波信号をさぐるこの方が先にしなくてはならない仕事だと思つていた。

そういう意味において、隆夫は、こんど組立てた受信機に大きな望みと期待とを抱いていた。

初めての実験

すっかり組立を終った。

隆夫は胸をおどらせて、金網の箱の外のパネルの前に、腰掛を寄せて、いよいよその受信機を働かせてみることになった。

電源を入れた。

しばらくすると、真空管のヒラメントがうす赤く光りだした。

そこで五つの目盛盤をあやつると、天井から下向きにとりつけてある高声器から、がらがらツと雑音ざっおんが出て来た。

「おやツ。雑音は出て来ないはずだが、なぜ出て来るんだろう」

雑音を完全に消すのが特長であるこの受信機が、スイッチを入れるが早いか、がらがらツとにぎやかに雑音を出したものだから、隆夫はすっかりくさってしまった。

「どこが悪いんだろうか」

電気を切ると、隆夫は金網戸を開いて、器械のそばへ行つた。

せつかつないだ接続をはずして、装置の各パートを、たんねんに診察しはじめた。それが終わったのが、朝の三時だった。結果は、どのパートも故障はなかった。

それからまた電源や出力側の接続をやり直した。それが完了すると、金網戸のところを外へ出、ぴつたりと戸をしめた。そしてパネルの前に再び腰を下ろし、もう一度頭の中で手落ちはないか

と確め、それから金網越しに、奥の台の上に列立する真空管や、鋭敏な同調回路の部品や、念入りに遮蔽してあるキャプタイヤコードの匐いまわり方へいちいち目をそそいだ。

「こんどこそ欠点なしだ」

確信をもつて彼は、電源のスイッチを入れた。そしてしばらく真空管の温まるのを待った。

がらがらッ。がらがらッ。

雑音が、またも天井裏の高音器から降ってきた。

しぶい顔をして隆夫は、又してもはねまわるぬ雑音に聞き入った。

「だめだッ」

スイッチを切る。

「いったいどこがいけないのか、見当がつかないや。どこも悪くないんだがなあ」

がっかりして、彼はとなりの図書室の長椅子ながいすの上へのびて、ねてしまった。

その翌日のことであつた。

学校のかえりに、二宮にのみやと三木みきがついて来た。

隆夫は二人を小屋の中の金網の前につれこんだ。そして前夜からのことをくわしく説明した。

「ちよつとスイッチを入れてみないか」

二宮がいったので、「よし」と隆夫は電源スイッチを入れた。

すると間もなく、例のがらがらツ、が始まった。だが昨夜ほど大きくはなかった。とはいふものの、他のよわい通信を聞き分けることは、とてもできないくらい雑音の強さは桁はずれに大きかった。

二宮も三木も、かわるがわるパネルの前に立つて、隆夫にききながら目盛盤をまわしている。いろいろ調整をやってみたが、さっぱり通信の電波は受からなかった。

ただ二宮は、こんなことをいった。

「この雑音ね、どの波長のところでも聞えることは聞えるけれど、この目盛盤で5から10ぐらいの間が強く聞えて、その両側ではすこし低くなるね」

「それはそうだね。その5とこの外では、急に回路のインピーダンスがふえるから、それで雑音も弱くなるのじゃないかなあ」

隆夫が意見をのべた。

「そうだろうか。しかしぼくはね、この雑音はふつうの雑音ではないような気がする。やっぱり信号電波が出ているんじゃないかなあ。しかしその電波は、鋭敏に一つの波長だけで出していないんだ。そうとう広い波長帯で、信号を放送しているんじゃないかなあ」

二宮は、かわった見方をしている。

「でもこれは雑音のようだぜ」

「ぼくもそう思う」

三木も隆夫に賛成した。

両説に分れたままで、その時は分れた。なぜならば、三人の少年たちの知識と実力とではそれを解決することができなかつたらだ。

友だち二人が帰ると、隆夫は小屋の中にひとりとなつたが、気が落ちつかなかつた。もう一度雑音を聞いてみた。雑音にちがいないと思ひながらも、妙に二宮のいつた広い波長帯をもつた放送かもしれないという説が気になつてならなかつた。そこで彼は決心して、小屋から出ていった。母親にことわつて、隆夫は外出した。彼が足を向けたのは、電波物理研究所で研究員をしている甲野博士うのはかせのところだつた。若い甲野博士は、電波の研究が専門で、

隆夫がアマチュアになったのも、この人のためで、隆夫の家とは遠い親戚しんせきにあたるのだった。

博士の批判

甲野博士にねだったかいがあつて、博士はその日研究所の歸りかえ路みちに、隆夫の家へ寄つてくれることになった。

もう退ひけ時ときに近かつたので、隆夫はしばらく待つてから、博士と連つれ立だつて、わが家へ向つた。

門を開いて、庭づたいに小屋の方へ歩いていると、お座敷のガラス戸ががらりとあいて母親が顔を出した。

甲野博士へのあいさつもそこそこにして、

「ねえ、隆夫。たいへんなことができたよ」

と、青い顔をしていった。

「どうしたの、お母さん」

「お前の研究室がたいへんなんだよ。さつきひどい物音がしたから、なんだろうと思っていつてのぞいてみるとね……」

母親は、あとのことばをいいかねた。

「どうしたんですか。早くいつて下さい」

「中がめちやめちやになっているんだよ。なんでもご近所のドラ

猫がとびこんだらしいんだがね、金網かなあみの中であばれて、たいへんなことになっているよ」

「えっ、金網の中？ それはたいへん」

隆夫は夢中で小屋の方へ走った。甲野博士もあとから、隆夫の母親と連れだつて小屋の方へゆつくり歩む。

まったく小屋の中はたいへんなことになっていた。もつともそれは金網の箱室の中だけのことであったが、隆夫が一生けんめいに組立てた受信機がめちやめちやにぶちこわされていた。大切な真空管も、大部分はこわれていた。ドラ猫は中にいなかった。金網の戸がすこしあいていた。

「しまった」と隆夫は思った、よく閉めておかなかつたのが悪か

ったのだ。なさけなさに、涙も出ず、隆夫は金網の戸をあけて中へはいったが、すみっこに鼠ねずみのしっぽが落ちているを見つけた。「ははあ。するとこの中に鼠が巣をつくっていたのかもしれない。そのため、あの雑音が起つたのであろう」

問題が解けたように思った。

そこへ博士と母親とがはいつて来た。

隆夫は、甲野さんにすべてを説明した。猫にあばれこまれたらしい話までした。

博士は、ちよつと考えていたが、

「さあ、鼠が巣をつくっていたのが雑音の原因かどうか、それはそうと考えられないこともないけれど、実際に装置を働かして聴

いてみた上でないと、何ともいえないね」

と、学者らしい慎しんちよう重ちゆうさでいった。

「困ったなあ。こんなにこわされたんでは、もう一度こしらえ直すことが出来るかどうか……」

「まあ、そうがっかりしないで、元気を出して、またつくってみるんだね。およそ研究というものは、辛しんぼう棒ぼうくらべみたいなものだ。忍耐力がないと成功はおぼつかない。……とにかく、装置の再建ができれば、また来て、見てあげよう。しかし君は、なかなかむずかしいことに手を染めたようだね。どれ、接続図と設計図とがあるなら出してごらん」

博士は図面を見て、いろいろとためになることを隆夫に注意し

た。が、最後にいった。

「……とにかく、とにかく、君は誰もやったことのない方法で受信をしようとしている。それだけに面白い。しかしはたして君に扱いきれるかどうか、疑問だね。そしてもしも異様な雑音いようが出たなら、それを録音しておくといいね。録音しておけば、あとでゆっくり分析も出来る。ぼくがやってあげでもいい。まあ力をおとさないように」

そういつて甲野博士は、小屋を出た。

隆夫は、その夜はへたばって、早く寝てしまった。

翌日になると、隆夫は元気をもりかえした。ちようど日曜だったので、彼は朝から「波動館」の中へはいり切りだった。

二宮君と三木君もやって来たので、三人して、猫と鼠の格闘かくとうでめちやめちやになった装置の復ふっきゆう旧を手つだつた。この仕事は、一日では終らなかつた。あと四五日はかかるであろうと思われた。

友だちが帰ってしまったあと、隆夫はひとりで金網室の中にぼんやりとしていた。が、彼は急に、電波のみだれ飛ぶ世界を耳でうかがつてみたくて、たまらなくなつた。

そこで大急ぎで、残つた部品を仮かりの接続でつなぎあわせ、金網の外へ出て、パネルについている電源スイッチをおそるおそる入れてみた。

受信波長の調整もしてないから、どのあたりの電波に同調する

か分らない。いやそれよりも、果して装置が働くかどうか疑問であつた。

真空管は、とぼつた。さあ次は雑音が出る番だ——と思つた。ところが、とつぜん天井の高声器から人の声がとび出した。ただの声でない。呻くうめような、呪つてのろいるような、男とも女とも分らない、いやな声であつた。

いったい何者なのか。電波怪異でんぱかいはこのときに始まる。

雑音ざつおんの推理

まさしく、高声器から、音声が出ているのだった。それは、何をいつているのか、意味が分らなかつたが、とにかくそれが音声であることは了解された。

怪音だ。いや怪音声だ。

隆夫は、うれしくて、ダイヤルをいろいろとひねくりながら、その怪音に聞きほれた。怪音が彼の氣にいつたのではなく、彼が長い間かかつて組立てた極超短波受信機ごくちょうたんぱじゆしんきが始めて働いてくれたことがうれしかったのだ。

「すごい。すごい。たしかに働いている」

彼は、にこにこ顔でひとりごとをいつたが、そのうちに気がつ

いたことは、このような一時的の配線では、どこかの電波を受信できながら、前に本格的にきちんと配線したときには、なぜ働いてくれなかったかということである。

「はじめの本格的配線のときには、いくども調べたんだから、配線にまちがいはないはずだ。どうもおかしいねえ」

わけが分らない。あとで、一時的配線をよく調べてみよう。それは本格的配線と同じにやったつもりだが、あるいはどこかに違った配線をしているのかもしれない。早くそれを調べたいが、今はそのひまがない。なにしろ電波が今、現げんに、この受信機にキャッチされている最中なんだから……。

「はて、これは何を喋しゃべっているのかな」

隆夫は、第三段目になって、ようやく高声器から今出ている高声が、怪音というべき種類のものであることに注意をそそぐようになった。

「なにかいつている。調子が日本語のようだが、どうもよく分らない。ああ、そうか。音がゆがんでいる上に、雑音もかなり交まじっているんだ。まず雑音をとつてみよう」

この雑音は、電波それ自身に交まじっている雑音であつた。その雑音を除はずくうまい方法を隆夫は知っていたから、早速さつそくその装置を保持もつて来て、取付けた。

すると、受信音は急にきれいになつた。耳ざわりな雑音が除かれたためである。

だが、あとに残った音声は、やはりアーティキュレーションがよくなかった。ふめいりよう不明瞭なのであった。

音声のゆがみは、直す方法がない。

もしありとすれば、それは受信機を構成している部品の特性の悪さや真空管のまずい使い方によるのであるが、そういう点については、隆夫は今までによく吟味ぎんみしてあったから自分のところの受信機はほとんどゆがみを生しょうじない自信があつた。

だからこの音声のゆがみは、その電波が受信機にはいる前に既に持っているゆがみなのだ。

隆夫はここまで推理を進めていって、ふうーッと溜息をついた。推理は、やっと半道はんみち来たばかりだ。その先が、難物なんぶつだ。とて

も手におえそうもない。

が、勇敢にぶつかろう。

音声ゆがみが、電波自体の中に既に含まれているものとすれば、それはどうしたわけでゆがみを生じたものであろうか。

送信装置がよくないために、そこにゆがみを生ずる原因がある
と考える。これはめずらしくないことだ。拙劣せつれつな変調装置を使

うとか、マイクロホンがよくないとか、増幅装置ぞうふくそうちがうまいところ
で働いてないとか、そういう素因そいんによつて音声はゆがめられる。

だが、権威ある送信局から出るものは、そんな劣悪れつあくなゆがみ
を持っていないと断定していいだろう。素人の作った送信機だと
か、何かの理由で、故障あるいは不調の送信機をやむを得ず使わ

なくてはならない場合だとか、あるいはまた、この通信に対して他からの露骨ろこつな妨害が加えられた場合には、ゆがみが起るであろう。

ゆがみの原因は、その他にもあろうが、だいたい今かぞえたのが普通考えられる場合である。

いや、まだ有った。それは、その音声を発する者自体が、そんなゆがんだ音声しか出せない場合である。たとえば、酒に酔っぱらって、口がまわらなくなった人間が、マイクの前に立ったとすると、ゆがんだ音声がマイクに入る。百歳に近い老人が死しにどこ床にいて、苦しい息の下から遺言ゆいごんをするような場合も、音声は相当ゆがんでいるであろう。

そんな場合でなくとも、生れつき発音が不明ふめいせき晰な人がある。そういう人がマイクの前に立てば、ゆがんだ音が送り出される。生れつきでなくとも、たとえば日本語を習いはじめたばかりの外国人から聞く日本語の発音のように、発音の不正確から来る音声のゆがみが考えられる。

「まず、ゆがみの原因について考えられることは、そのくらいであらう」

隆夫は、可能な場合をほとんど残らず数えあげたと思って、ほつと吐息といきした。あとは、今の場合、ゆがみがどの原因によって起っているかを突き止めることだ。

しばらく隆夫は、天井にとりつけた高声器から聞えてくるくし

やくしやいう受信音に耳を傾けた。

「なんといういやな声だろう。何と知っているのか、ちつとも分りやしない。うむ待てよ。これは参考のために録音しておこうや」
隆夫は大急ぎで腰掛からとびあがった。そして録音機をとり、となりの部屋へいった。

苦しい会話

録音が行われた。

約五分間にわたつて、録音された。

隆夫は、その録音した受信機をもとにして不明瞭な音声ふめいりようをなんとか分析して、その言葉の意味を読みとるつもりだった。

それには少々装置の用意がある。二三日はかかるであろう。

隆夫は急に疲労をおぼえた。さつきから緊張のしつづけであつたためであろう。となりの寢室へ行つて、しばらく睡ることにした。あいかかわらず高声器からは、わけのわからない言葉がひきつづき出ていた。隆夫は、受信機のスイッチを切ろうと手を出したが、そのとき気がかわつて、スイッチは切らないでそのままにしておくことにした。

隆夫は、けいべんしんだい軽便寢台の上に毛布にくるまつて、ぐっすり睡つ

た。

ふと眼がさめた。

が、まだ睡くてたまらない。ぴったりくつついた^{まふた}瞼をむりやり
にあけて、夜光の腕時計を見た。

午前三時だった。すると、あれから一時間半くらい睡ったわけ
だ。まだ猛烈に睡い。

その睡いなかに、隆夫はふとぼそぼそと話し合っている人声を
聞きとがめた。それは近くで話している。

「……さあ、君はそういうが、万一失敗したときには、どうする
んだね」

「失敗したときは、失敗したときのことですわ。たとえば失敗して

も、今のようなおもしろくない境きょうぐう遇ぐうにくらべて、この上大した苦痛が加わるわけでもありませんものね」

女の声であった。

男と女の話声だった。ゆっくりゆっくり、ぼそぼそと語り合っている。声は若いが、その語る調子は、ふけた老人のように低い空虚なものであった。

隆夫はだんだん目がさめて来た。

「……そういう冒険は、よした方がいいと思うね。君は、僕がひっこみ思案だと軽蔑けいべつするだろう。しかしね、僕は今までに君のような冒険を試みて、それに失敗して、ひどい目に会った連中のことをたくさん知っているのだ。彼らは、失敗してこっちへ戻っ

てくるともうすっかりきりよく氣力がなくなつてね、そのうえにあの世
界でいろいろなあく邪惡にそ染まつて、それを洗いおとすために、それ
はそれはひどい苦しみをくりかえすのだ。僕はとても長くはそれ
を見守つていられなかつた……」

「もう、たくさんよ、そのお話は。そのようなことは、あたくし
も知っていますし、そしていくども考えても見ましたの。その結
果、あたくしの心は決つたんです。どうしても、行つて見たい。
肉体を自分のものになりたい。二度以上はともかくも、一度はぜひ
そうなつてみたい。あなたがあたくしのために親切にながなと
いつて下さつたのはうれしいのですけれど、あたくしは、今日の
前に流れて来ている絶好の機会をつかまないでいられないのです」

「ああ、それがあぶないんだ。僕は何十ペンでも何百ペンでも、君をひきとめる」

「どういったら、あなたはあたくしの気持を分つて下さるでしょうか。じれったいわ」

「僕はどうあつても——」

「あ、ちよつと黙つて……あ、そうだ。ええ、行きますとも。あたくしも。誰がこの絶好の機会をのがすものですか」

「お待ちなさい。あなたは、だまされているんだ。苦しみだけが待っている世界へ、あなたはなぜ行くのですか。……ああ、とうとう行つてしまった」

男の声は、気の毒なほど絶望のひびきを持っていた。女の声は、

それからあと、いくら待っても聞かれなかった。いや、男の声も、それっ切りで終った。

隆夫は、今の会話の途中から、二人の会話がとなりの実験室の天井にとりつけてある高声器から出てくるものであることに気がついていた。

なぜか理由はわからないが、さつきはあれほど不明瞭ふめいりようだった。音声おんせいが、目のさめたときから急に明瞭めいりょうになったらしい。またその音声もずっと大きくなった。大きく、明瞭な話し声になったので、自分は目がさめたんだなど、隆夫は気がついた。

念のために彼は、寝台から下りて、となりの実験室へ行って見た。

天井の高声器は、ちゃんと働いていた。もちろん音声は出ていないが、小さくがりがりと音がして、働いているのが知れた。「ふしぎだ。ふしぎな会話だ。いつたいどの誰と誰との会話なんだろうか。まさか、あれが放送のドラマの一部だとは思われない。放送なら、あのあとにアナウンスがあるはずだし、あんな場面なら伴奏ばんそうがなくてはならないはず」

この疑問は、すぐには解けなかった。
やがて夜明けが来た。

そして朝の行事がいつものように始まった。食事をしてから、隆夫は学校へいった。

二宮孝作にのみやこうさくや四方勇治よっかたゆうじがそばへやって来たので、隆夫はさ

つそく昨夜奇妙な受信をしたことを話して聞かせたら、二人とも

「ヘーッ、そうかね」とびつくりしていた。

「三木^{みき}はどうしたんだ。今日は姿が見えないね」

三木にこの話をしてやったら一番よろこぶだろうに。

「三木か。三木は今日学校を休むと、ぼくのところへ今朝^{けさ}電話をかけて来たよ」

と、二宮がいった。

「ああ、そうか。また風邪をひいたのか」

「そうじゃない。病人が出来たといっていた」

「うちに病人？ 誰が病気になったんだろう。彼が休むというか
らには、相当重い病気なんだろうね」

「ぼくも聞いてみたんだ。するとね、あまり外へ喋しゃべってくれな
 とことわって、ちよつと話しがね、彼の姉なつさんのお名津ちゃん
 がね、とつぜん気が変になつたので、困っているんだそうな」

「へえーッ、あのお名津ちゃんがね」

「午前三時過ぎからさわいでいるんだって」

「午前三時過ぎだつて」

隆夫はそれを聞くと、どきんとした。

脳のうはしゅうろく波収録

なぜ隆夫は、どきんとしたか。

そのわけは、それを聞いたとき、彼が知っている三木の姉名津なつ子の声こが、昨日の深夜、図らずも自分の実験小屋で耳にした女の声によく似ていることに気がついたからであつた。実は昨夜もある声を聞いたとき、どうも聞きおぼえのある声だとは思つたが、それが名津子の声に似ているとまで決定的に思出すことができなかつたのだ。

(ふーん。これは重大問題だぞ)

隆夫は、腹の中で、緊張した。

しかし彼は、このことを三木たちに語るのをさし控えた。それ

は万一ちがつていたら、かえつて人さわがせになるし、殊ことに病人を出して家中が混乱しているところへ、新しい困こんわく惑くわくを加えるのはどうかと思つたのである。

そのかわり、彼はこれを宿題として、自分ひとりで解いてみる決心をした。そして、いよいよ確実にそうと決つたら、頃ころあひ合あひを見はからつて三木に話してやろうと思つた。

「どうして。君は急に黙つてしまつたね」

二宮が、隆夫にいつた。隆夫は苦笑した。

「うん。ちよつと、或ることを考えていたのでね」

「何を考えこんでいたんだい」

「気が変になつた人を治療する方法は、これまでに医学者によつ

て、いろいろと考え出された。しかしだ、実際にこの病気は、あまりなおりにくい。それから、今までとは違った治療法を考え出す必要があると思うんだ。そうだろう」

「それはわかり切ったことだ」

誰もみな隆夫のいうことに異議はなかった。

「そこでぼくは考えたんだが、そういうときに、病人の脳から出る電波をキャッチしてみるんだ。そしてあとで、その脳波を分析するんだ。それと、常人の脳波と比較してみれば、一層なにかはつきり分るのではないかと思う。この考えは、どうだ」

「それはおもしろい。きつと成功するよ」

「いや、ちよつと待った。脳波なんて、本当に存在するものかし

らん。かりに存在するものとしてもだ、それをキャッチできるだろうか。どうしてキャッチする。脳波の波長はどの位なんだ」

よつかたゆうじ
四方勇治が、猛然と新しい疑問をもちだした。

「脳波が存在するかどうか、本当のことは、ぼくは知らない。しかし脳波の話は、この頃よくとび出してくるじゃないか。でね、

脳波はいかなる理論の上に立りつきやく脚して存在するか、そんなこと

は今ぼくたちには直接必要のない問題だ。それよりも、とにかく

短いびじやく微弱な電波を受信できる機械を三木君の姉さんのそばへ持

つていつて、録音してみたらどうかと思うんだ。もしその録音に

成功したら、新しいちりようほう治療法発見の手がかりになるよ」

「それはぜひやってくれたまえ、隆夫君」

この話をすると、三木は、はげしい昂奮こうふんの色を見せて、隆夫の腕をとらえた。

「おい、四方君よっかた。君はどう思う」

「脳波の存在が理論によつて証明されることの方が、先決せんけつ問題もんだいだと思うね。なんだかわけのわからないものを測定したつて、しようがないじゃないか」

「いや、机の前で考えているより、早く実験をした方が勝ちだよ」と、二宮孝作にのみやこうさくが四方の説に反対した。

「元来がんらい日本人はむずかしい理屈をこねることに溺れおぼすぎている。だから、太平洋戦争のときに、わが国の技術の欠陥をいかななく曝露ばくろしてしまったのだ。ああいうよくないやり方は、この際さら

りと捨てた方がいい。分らない分らないで一年も二年も机の前で悩むよりは、すぐ実験を一週間でもいいからやってみることだ。

机の前では、思いもつかなかつたようなことが、わずかの実験で「おやおや、こんなこともあつたのか」と分つちまうんだ。頭より手の方を早く働かせた方がいいよ」

「まあ、とにかく、その実験をやることにして、ぼくはその準備にかかるよ。隆夫君、手つだつてくれるね」

三木がそういつたので、万事は決つた。^{ぼんじ}もちろん隆夫は協力を同意したし、二宮も手を貸すといい、四方までが、ぼくにも手伝わせてくれと申出た。

四人の協力によつて、三日のちに、機械の用意ができた。

その日の午後、一同は三木の家で、仕事を始めた。

名津子なつこの病床には、母親が病人よりもやつれを見せて、看護にあたっていた。まことに気の毒な光景だった。

一同がその部屋にはいったとき、病人はすやすやと睡っていた。なるべく音のしないように、機械を持ちこんだ。

機械は、電波をつかまえるため小さい特殊とくしゆがたくうちゆうせん型空中線と、

強力なる二次電子増倍管にじでんしぞうばいかんを使用し、受信増幅装置じゆしんぞうふくそうちと、それ

から無雑音むざつおんの録音装置とを組合わせてあつた。そして脳から

出る電波の収録しゆうろくをすると共に、病人の口から出ることばとを

同時録音することも出来るようになっていた。

いよいよその仕事が始まった。

病人の目をさまさないうちに、睡眠中病人の脳から出ている電波をとらえることになった。隆夫は受信機の調整にあたり、三木は空中線を姉の頭の近くへ持つていって、いろいろと方向をかえてみる役目を引受けた。あとの二人は録音や整理の仕事にあたる。

深夜しんやの影

「どうだい、何か出るかい」

受信機が働きはじめたとき、三木はすぐそれをたずねた。

「いや出ない」

「だめなのかな」

「そうともいえない、とにかくいろいろやってみた上でないと、
断だん定ていはできない」

隆夫は、波長帯はちようたいを切りかえたり、念入りな同調どうちようをやつたり、増幅段数ぞうふくだんすうをかえたりして、いろいろやってみた。

「この機械の受信波長じゅしんはちようは、どれだけのバンドを持っているのかね」

四方よつかたが、隆夫に聞く。

「波長帯は、一等長いところで十センチメートル、一等短いところでは一センチの千分の一あたりだ」

「そうとうな感度を持つているねえ」

「いや、その感度が一様にいつてないので、困っていることもあるんだ」

電波は長波、中波、短波と、だんだん波長が短くなつてきて、もつと短くなると超短波となり、その下は極超短波となる。そのへんになると赤外線せきがいせんの性質を帯びて来る。一センチの何千万分の一となると、もう電波であるよりも赤外線だ。そうになると、装置はますますむずかしさを加える。

「なんか出て来たよ。しかしさわがないでくれたまえ」

隆夫が昂奮こうふんをおしつけかねて、奇妙な声を出す。

一同の顔が、さつと紅潮こうちようして、隆夫の顔に集まる。

隆夫は手まねで三木に空中線の向きや距離をかえさせる。そしていそがしくスイッチを切ったり入れたりして、その目は計器の上を走りまわる。

「これらしい。これがそうだろう」

隆夫はひとりごとをいつている。

「ああッ、飛ぶ、飛ぶ、赤い火がとぶ……」

とつぜん、高い女の声。

名津子^{なつこ}が口を聞いたのだ。彼女は目がさめたものと見え、むつくりと床から起上ろうとして、母親におさえられた。

「名津ちゃん。おとなしくしなさい。母さんはここにいますよ」

母親は涙と共に娘をなだめる。

それからの三十分間は電波収録班大苦闘でんぱしゅうろくはんだいくとうの巻まきであつた。なにしろ目がさめた名津子は、好きなように暴れた。弟の三木も何もあつたものではなく、空中線はいくたびか折られそうになつた。母親と三木は、そのたびに汗をかいたし、隆夫たちははらはらしどおしだつた。そして予定よりも早く実験を切りあげてしまつた。三木に別れをつけて、残る三人の短波ファンは、そこを引揚げた。

三人は隆夫の実験小屋へ機械をもちこんで、しばらく話し合つた。すると、二宮がしかつめらしい顔をして、こんなことをいいだした。

「人間のからだが生きているということだね。からだをこしらえ

ている細胞の間は、放電現象が起つたり、またそれを充電したり、そういう電氣的の営いとみが行われていることなんだとき。だから三木の姉さんみたいな人を治療するには、感電をさせるのがいいんじゃないかな。つまり電でん撃げき作さく戦せんだ」

「それは電撃作戦じゃなくて、電撃療り法ほうだろう」

「ああ、そうか。とにかく高圧電気を神しん經けい系けい統とうへぴりつと刺さすと、とたんに癒なつちまうんじゃないかな」

「それは反対だよ」

四方が首を振った。

「なぜだい、なにが反対だい」

「だって、そうじゃないか。神経細胞は電線と同じように、導どうで

電んたい体だ。しかも弱い電流を通す電路なんだ。そこへ高圧電氣をかけるとその神経細胞の中に大きな電流が流れて、神経が焼け切れてしまう。そうなれば、人間は即座そくざに死ぬさ」

「いや、電流は流されないようにするんだ。そうすれば神経細胞は焼け切れやしないよ。ねえ、隆夫君、そうだろう」

「さあ、どつちかなあ。ぼくは、そのことをよく知らないから、答えられない」

この問題は懸案けんあんになった。

そこへ隆夫の母が、甘味あまみのついたパンをお盆ぼんにのせてたくさん持って来てくれたので、三人はそれをにこにこしてぱくついた。やがてお腹がいっぱいになると、急に疲れが出て来て、睡くなっ

た。それだから、その日はそれまでということにして、解散した。さて、その夜のことである。

隆夫はひとりで実験小屋にはいった。

彼は、今日とつて来た録音が気がかりで仕方がなかった。

それで脳波の収録のところを再生してみることにした。つまり、もう一度脳波にして出してみようと思ったのだ。

隆夫は、大急ぎでその装置を組立てた。

それから脳波を収録したテープをくりだして、その送信機につっこんだ。

もちろん隆夫には、その脳波は聞えなかったけれど、けんはけい 検波計のブラウン管で見ると、脳波のしゅつりよく 出力が、けいこうばん 蛍光板の上に明る

いあとをひいてとびまわっているのが見えた。

隆夫は、この脳波を、いかにしてことばに変化したらいいかと
考えこんだ。

その間に収録テープは、どんどんくりだされていた。脳波は、
泉から流れ出す清流せいりゅうのように空間に輻射ふくしゃされていたのだ。

それを気に留めているのか、いないのか、隆夫は腰掛にかけ、
背中を丸くして考えこんでいる。

そのとき隆夫のうしろに、ぼーッと人の影が浮び出た。若い男
の姿であった。その影のような姿は、こまかく慄ふるえながら、すこ
しずつ隆夫のうしろへ寄よつていく。

「もしもし、一いち畑はた君。君の力を借りたいのです。ぼくに力を貸

してくれませんか」

陰いん気きな、不明ふめい瞭りょうなことばが、その怪かい影えいの口から発せられた。

そのとき隆夫は、ふと我れにかえつて、身ぶるいした。そして
ふしぎそうに見廻したが遂に怪影を発見して

「あッ。あなたは……」

と、おどろきの声をのんだ。

意外なな名の乗り

隆夫は、ぞおーツとした。たかお

急にはげしい悪寒おかんに襲われ、おそ気持がへんになった。目の前に、

あやしい人影をみとめながら、声をかけようとして声が出ない。

脳貧血のうひんけつの一步手前のうひんけつにいるようでもある。

(しつかりしなくては、いけないぞ！)

隆夫は、自分の心をげきれい激励した。

「気をおちつけなさい。さわぐといけない。せつかくの相談がで
きなくなる」

低いが、落ちつきはらった声で、一語一語をはつきりいって、

隆夫の方へ近づいて来た影のような人物。ことばははつきりして

いるが、顔や姿は、風呂屋の煙突えんとつから出ている煙のようになす

い。彼の身体を透してうしろの壁にはつてあるカレンダーや世界地図が見える。

(幽霊というのは、これかしらん)

もうろうたる意識の中で、隆夫はそんなことを考える。

「ほう。だいぶん落ちついてきたようだ。えらいぞ、隆夫君」

あやしい姿は、隆夫をほめた。

「君は何物だ。ぼくの実験室へ、無断むだんではいつて来たりして……」

このとき隆夫は、はじめて口がきけるようになった。

「僕のことかい。僕は大した者ではない。単に一箇の靈魂れいこんに過

ぎん」

「れ、い、こ、ん？」

「れいこん、すなわち魂たましいだ」

「えッ、たましいの靈魂れいこんか。それは本当のことか」

隆夫はたいへんおどろいた。靈魂を見たのは、これが始めてであつたから。

「僕は靈魂第十号と名乗っておく。いいかね。おぼえていてくれたまえ」

「靈魂の第十号か第十一号か知らないが、なぜ今夜、ぼくの実験室へやって来たのか」

隆夫は、まだ気分がすぐれなかった。猛烈に徹夜の試験勉強をした上でマラソン二十キロぐらいやったあのような複雑な疲労を背負っていた。

「君が呼んだから来たのだ。今夜が始めてではない。これで二度目か三度目だ」

あやしい影は、意外なことをいった。

「冗談をいうのはよしたまえ。ぼくは一度だって君をここへ呼んだおぼえはない」

「まあ、いいよ、そのことは……。いづれあとで君にもはつきり分ることなんだから。それよりも早^{さっそく}速君に相談があるんだ。君は僕の希望をかなえてくれることを望む」

靈魂第十号ははじめから抱いていた用件を、いよいよ切り出した。

「話によつては、ぼくも君に協力してあげないこともないが、し

かしとにかく、君の礼儀を失したずうずう凶々しいやり方には好意がもてないよ」

「うん。それは僕がわるかった。大いに謝る。そして後で、いくらでも君につぐないをする、許してくれたまえ」

第十号は、急に態度をかえて、隆夫の前に謝罪しやげいした。

「……で、どんな相談なの」

「それは……」 靈魂第十号は、彼らしくもなく口ごもった。

「いいにくいことなのかね」

「いや、どうしても、今、いつてしまわねばならない。隆夫君、僕は君に、しばらく靈魂だけの生活を経験してもらいたいんだ。承知してくれるだろうね」

「なに、ぼくが靈魂だけの生活をするって、どんなことをするのかね」

「つまり、君は今、肉体と靈魂との両方を持っている。それでだ、僕の希望をききいれて、君の靈魂が、君の肉体から抜けだしてもらえばいいんだ。それも永い間のことではない。三カ月か四カ月、うんと永くてせいぜい半年もそうしていてもらえばいいんだ。なんとやさしいことではないか」

あやしい影は、隆夫が目を白黒するのもかまわず、奇抜きぼつな相談をぶつつけた。

「だめだ。第一、ぼくの靈魂をぼくの肉体から抜けといても、ぼくにはそんなむずかしいことはできない。それにぼくは現在ち

やんと生きているんだから、靈魂が肉体をはなれることは不可能だ」

「ところが、そうでなく、それが可能なんだ。そして又、君の靈魂に抜けてもらう作業については、すこしも君をわずらわさないでいいんだ。僕がすべて引き受ける。君はただそれを承知しさえすればいいんだ。めったにないふしぎな経験だから、後で君はきつと僕に感謝してくれることと思う。承知してくれるね」

隆夫はこの話に心を動かさないわけでもなかった。しかし、不安の方が何倍も大きかった。もっと相手が、自分に十分の安心をあたえるように説明してくれたら、一カ月やそこいらなら靈魂だけでとびまわってみるのもおもしろかろうと思った。

が、そのときだった。隆夫は急に胸むなぐる苦しきをおぼえた。はつとおどろくと、あやしい影が隆夫のくびをしめつけているではないか。

「なにをする。ぼくはまだ承しょうだく諾だくしていないぞ。それはともかく、人殺ひところしみたいに、ぼくのくびをしめるとはなにごとだ」

隆夫は苦しい息の下から、あえぎあえぎ、相手をののしった。

「はははは。はははは」

相手は、ほがらかに笑いつづける。隆夫は腹が立ってならなかった。しかし自分の意識が刻々うすれていくのに気がつき恐きよこ慌わうした。

「はははは。もうすこしの辛しんぼう棒ぼうだ」

「なにを。この野郎」

隆夫は、残っているかぎりの力を拳こぶしにあつめ、のしかかってくる相手の上に猛烈なる一撃を加えた——と思つた。果して加え得たかどうか、彼には分らなかつた。彼は昏倒こんとうした。

早朝の訪問者

その翌朝よくあさのことであつた。

三木健が、自分の家の玄関脇の勉強室で、朝勉強をやっている

と、玄関に訪う人の声があつた。

三木はすぐ玄関へ出て扉をあけた。

「お早ようございます。名津子さんの御容態ごようだいはいかがですか。お見舞にあがりました」

「はッはッはッ。よしてくれよ、そんな大時代な芝居がかりは……」

三木は腹を抱えて笑つた。

というわけは、玄関の扉をあけてみると、そこに立っているのは余人にあらず、仲よし友達のひとりである一畑隆夫いちへはただかおであつたから。その隆夫が、なんだって朝つぱらからやつてきて、この鹿しか爪かづめらしい口のききかたをするのか、それは隆夫が三木をからか

っているのだとしか考えられなかった。

「これはこれは健君。失敬をした。許してくれたまえ。姉さんに会いたいんだがね、よろしくたのむ」

隆夫は、三木が笑ったときに、どういうわけかあわてて逃げ腰になった。が、すぐ立ち直つて、このようにおうたい応対をした。

三木は、べつに隆夫のことを何とも思つていなかった。

「うん。それじゃ今母に知らせてくるからね。ちよつと待つていてくれ」

「いや、待てない。すぐ会いたい」

隆夫はひどく急いでいる。三木は、隆夫のおしの強いのに、すこし気をわるくした。だが大したことではないと、三木はすぐ自

分の気持を直した。

「でも、病人だからね、様子を見た上でないと、かえって病気にさわれると悪いから」

「じゃあ早くしてくれたまえ」

「よしよし」

三木は母親のところへとんでいって、今、隆夫君が来てこうこ
うだと話した。母親は、昨夜親切に隆夫たちが来て、器械を使っ
て調べていってくれたことをたいへん感謝していて、それでは病
人の様子を見ましようとして、病室にはいった。

名津子は、血の気のない顔で、髪を乱したまま、すやすやと睡
っていた。

そこで母親は三木のところへ戻つて来て、今病人は疲れ切つてすやすや睡っているから、目がさめるまで、しばらくの間、隆夫さんに待っていてもらおうようにといった。

三木は、そのことを隆夫のところへ来て話した。

すると隆夫は、大いに不満の顔つきになつて、

「君たちは、ぼくを名津子さんに会わせまいとするんだな。けしからんことだ」

と、意外にきついことばをはいた。

これには三木もあきれてしまった。そんなことがあるはずはない。隆夫はなにをかんちがいしているのであるかと、三木はそれからいくどもくりかえして、昨夜さくや姉があばれたり泣いたり、

叫んだりして、ほとんど一睡もしなかつたことを語り、

「……………だから、今疲れ切つてすやすや睡っているんだ。できるだけゆっくりねかしておきたい、でない、姉は衰弱がひどくて、じゆうたい おちい重態おちいに陥る危険があるのだ」

という、隆夫は、なるほど、そうかそうかと合点して、ややおとなしくなった。しかし名津子の目がさめたら、すぐ自分のところへ知らせること、そしてすぐ自分を病室へつれていって名津子にあわせることを、くどくどとのべて、三木に約束させた。

三木は、このときになって、拭ぬぐい切れきない疑問を持つに至つた。(どうも隆夫君の様子がへんだぞ。なぜ今日になって、姉に会いたがるのか、さっぱりわけが分らない。昨夜の実験の結果、急に

姉に会う必要が生じたのかしら。それならそれといひいそうなものだが……。なんだか隆夫君までおかしくなつて来た)

隆夫は、三木の勉強部屋へ通された。

しかし彼は三木に向きあつたまま、急に無口むくちになつてしまつた。なにかしきりに考えこんでいるようである。ふだんの明るい隆夫の調子は見られない。

そこで三木は、話しかけた。

「昨夜、電波収録装置でんぱしゅうろくそうちに取つていった、あれはどうしたね。

結果は分つたかい」

「あれか。あれはよく取れていたよ」

「そうか。するとあれを使つて、これからどうするのか」

「どうするって。さあ……」隆夫は困った顔になった。

「どうするって、とにかくあれは参考になるね」

「君は、もしあの中に、電波が収録されていたら大発見だ。そしてそうであれば姉の病気についても、新しい電波治療が行えることになろうといっていたが、それはどうだね」

隆夫はなぜか狼^{ろう}狽^{ばい}の色を見せ、

「いや、そんなことはでたらめだ。病人を電波の力で癒^{なお}すなんて、そんなことは出来るものではない」

「おかしいね。さつき君のいったことともくいちがっているし、君が日頃語っていたところともちがう。いったいどれが本当なんだ」

「断^{だん}じて、僕はいう。君の姉さんの病氣はきつと僕がなおして見せる。そのかわり、昨日僕がいったことは、一時忘れていてくれたまえ。今日から僕は、新しい方法によつて、名津子さんの病氣を完全になおしてみせる。もし不成功に終つたら、僕はこの首を切つて、君に進^{しんてい}呈^{てい}するよ」

そういつて隆夫は、自分のくびを叩いた。ひどく昂^{こうふん}奮^{ふん}している様子だった。

そのとき母親がはいつてきて、名津子が目がさめたようですから、と隆夫たちを迎えに来た。

昨日にかわり隆夫の様子がちがっているのは、どうしたことであらうか。

ここは何処^{どこ}

ここまで書いてくると、賢明なる読者は、怪しい隆夫のふるまいのうしろに何が有るかを、もはや察せられたことであろう。

そのとおりである。

名津子を見舞に來た隆夫は、その肉体はたしかに隆夫にちがいないが、その肉体を支配している靈^{れい}魂^{こん}は、隆夫の靈魂ではないのだ。それは例の靈魂第十号なのである。

前夜隆夫は、とつぜん靈魂第十号の訪問をうけ、そして肉体を半年ほど借りたから承知をしろと申入れられた。隆夫は、それをことわった。すると隆夫は、とつぜん首をしめられ、人事不省に陥ったのだ。

その直後、どういう手段によったものか分らないが、隆夫の肉体から隆夫の靈魂が追い出され、それにかわつて靈魂第十号がはいりこんだのである。まさにこれはギャング的靈魂だといわなくてはならない。

とにかくこんなわけだから、翌日隆夫が三木家をたずねたとき、とんちんかんのことばかりいい、家人から不審ふしんをかけられたのだ。つまり第十号としては、隆夫の靈魂に入れ替かわつたものの、すべて

隆夫のとおりをまねることはできなかつたし、また隆夫の記憶や思想をうまく取り入れることは一層むずかしかつた。

だが、第十号としては、すこしぐらい人々から怪しまれることは、がまんするつもりだつた。それよりも、彼がねらつてゐることとは、名津子に近づくことだつた。名津子の靈魂にぴつたり寄りそつていた**いばかり**に、彼はこの思い切つた行動を起したのだ。しかしながら、彼の筋書すじがきどおりに、万事がうまくいくかどうか、それはまだ分らない。

それはそれとして、一方、靈魂第十号のために肉体から追い出された隆夫の靈魂は、一体どうなつたのであろうか。

彼の靈魂は、肉体と同じに、一時もうろう状態に陥つていた。

いや、時間的にいえば、肉体の場合よりもはるかに永い間にわたつてもうろう状態をつづけていた。第十号が、彼の肉体にはいりこんで、三木健の家を訪問してペちやくちやしやべつているときにも、隆夫の靈魂は、まだもうろうとして、はてしなき空間をふわついていた。

彼のたましいが、われにかえたのは、それから十四日のこのことだった。

たましいが、われにかえるというのは、おかしい方であるが、肉体の中にはいつているときでも、たましいというやつは、よく死んだようになつたり、生きかえつたりするものである。ねむりと目ざめ。不安におちいることと大自信にもえること。人事

不省と覚醒かくせい。酔よっぱらいと酔いぎめ。そのほか、いろいろとあるが、このようにたましいというやつは、いつも敏感びんかんで、おどおどしており、そして自分からでも、また他からの刺戟しげきによっても、すぐ簡単に状態を変える。

とにかく、彼のたましいがわれにかえったとき、「おやおや」と起きあがつてあたりを見まわすと、見なれないところへ来ていることが分った。

そこは、枯草かれくさがうず高くつんであるすばらしく暖かな日なただった。ゆらゆらと、かげろうが燃え立っていた。その中に、隆夫の靈魂は立っているのだった。彼の靈魂も、かげろうと同じように、ゆらゆら動いているような気がした。

前方を見ると、美しい大根畑が遠くまでひろがっていた。まるでゴツホの絵のようであつた。

うしろの方で、モーという牛の声が出た。うしろには小屋が並んでいた。そのどれかが牛小屋になっているらしい。

かたかたかたと、いやに機械的なひびきが聞えてきた。ずっと西の方にあたる。その方へ隆夫の靈魂はのびあがつた。トラクタ―が動いているのだつた。土地を耕たがやしている。それは遥はるかな遠方だつた。

「広いところだなあ。一体ここはどこかしらん」

すると、彼の前へ、とつぜんパイプをくわえ、肩に鋤くわをかついだ農夫が姿をあらわした。そして農夫の顔を見たとき、隆夫のた

ましいは、あつとおどろいた。

「ややツ、ここは日本じゃないらしい」

農夫は白人はくじんだった。

白人の農夫がいるところは、日本にはない。しばらくすると、小屋のうしろから、若い女の笑い声が聞えて、隆夫のたましいの前へとび出して来たのは、三人の、目の青い、そして金髪きんぱつやブルンドの娘たちだった。

「たしかにここは日本ではない。外国だ。どうして外国へなど来てしまったんだらう」

そのわけは分らなかつた。

隆夫のたましいは、農夫たちの会話を聞いて、それによつてこ

こがどこであるかを知ろうとつとめた。彼らの話しているのは、外国語であった。それはドイツ語でもなく、スラブ語でもなかったが、それにどこか似ていた。ことばとしては、隆夫はそれを解かいしやくする知識がなかったけれど、幸いというか、隆夫は今たましいの状態にいますので、彼ら異国人の話すことばの意味だけは分った。

そして、ついにこの場所がどこであるかという見当がついてきた。それによると、ここはバルカン半島のどこかで、そして割合にイタリヤに近いところのように思われる。ユーゴスラビア国ではないかしらん。もしそうなら、アドリア海をへだててイタリヤの東岸とうがんに向きあっているはずだった。

どうしてこんなところへ来てしまったんだろう。

霊魂れいこんの旅行

だんだん日がたつにつれ、隆夫のたましいは、たましい慣なれがしてきた。はじめは、どうなることかと思つたが、たましいだけで暮していると、案外気楽なものであつた。第一食事をする必要もないし、交通禍こうつうかを心配しないで思うところへとんで行けるし、寒さ暑さのことで衣服の厚さを加減かげんしなくてもよかつた。そして、

睡りたいときに睡り、聞きたいときに人の話を聞き、うまそうな料理や、かわいい女の子が見つければ、誰に追いたてられることもなく、いく時間でもそのそばにへばりついていられた。もつとも、そのうまそうな御馳走を味わうことは、たましいには出来なかつたが……。

そういうわけで、隆夫のたましいは、一時東京の家のことや母親のことや、それから友だちのことなどもすっかり忘れて、気軽なたましいの生活をたのしんでいた。

いつも寝起きしていた枯草の山が、トラックの上へ移しのせられ、どこかへはこばれていく。それを見た隆夫のたましいは、いっしょにそのトラックに乗って行ってみようと思った。

その日は、天氣が下り坂になつて来て風さえ出て来たので、農夫たちは急いで枯草かれくさを車へのせ、その上をロープでしつかりしぱりつけた。それから荷主の農夫が、パイプをくわえたまま、トラックの運転手にいった。

「とにかくカツタロの町へはいつたら、海岸かいがんどおり通のヘクタ賢ほうえ易商きしょう会はどこだと聞けば、すぐに道を教えてくれるからね」

「あいよ。うまくやってくるよ」

トラックは走りだした。

隆夫のたましいは、枯草の中へ深くもぐりこんで、しばらく睡ることにした。車が停つたら、起きて出ればよいのだ。そのときはカツタロの町とかへ、ついているはずだ。

たましいは、ぐっすり寝こんだ。

運転手の大きな声で、目がさめた。枯草をかきわけて出てみると、なるほど町へついていた。古風な町である。が、町の向うに青い海が見える。港町だ。

港内には、大小の汽船が七八隻そうていはく碇泊している。西日が、汽船の白い腹へ、かんかんとあたっている。

トラックが、また走りだした。

港の方を向いて走る。隆夫のたましいは、車上からこの町をめずらしく、おもしろく見物した。革命と戦火にたびたび荒されたはずのこの港町は、どういうわけか、どこにも被害のあとが見られなかった。そしてどこか東洋人に似た顔だちを持った市民たち

は、天国に住んでいるように晴れやかに 哄こうしょう笑し微笑し空をあ
おぎ手をふつて合図をしていた。婦人たちの服装も、赤や緑や黄
のあざやかな色の布ぬのや毛糸を身につけて、お祭の日のように見え
た。

そのうちにトラックは、海岸通へ走りこんで、ヘクタ貿易商会
の前に停った。枯草は、この商會が買収するらしい。そのような
取引を、隆夫のたましいは見守っていたくはなかった。彼は、今
しも岸壁がんぺきをはなれて出港するらしい一隻の汽船に、気をひかれ
た。

彼は燕つばめのように飛んで、その汽船のマストの上にとびついた。

ゼリア号というのが、この汽船の名だった。五百トンもない小貨

物船であつた。

それでも岸壁には、手をこつちへ振っている見送り人があつた。船員たちが、ハンドレールにつかまつて、帽子をふつて、岸壁へこたえている。煙突えんとつのかけからコックが顔を出して、ハンカチをふつている。隆夫のたましいが、つかまつているマストの綱つなばしごにも、二三人の水夫がのぼつて、帽子を丸くふつていた。かめめでもあろうか、白い鳥がしきりに飛び交っている。その仲間の中には、隆夫のたましいのそばまで飛んできて、つきあたりそうになるのもいた。

「港外まで出ないと、ごちそうを捨ててくれないよ」

「早く捨ててくれるといいなあ。ぼくは腹がへっているんだ」

かもめは、そんなことをいいながら、この汽船が海へ捨てるはずの調理室ちようりしつの残りかすを待ちこがれていた。

隆夫のたましいは、久しぶりにひろびろとした海を見、潮しおのにおいをかいで、すっかりうれしくなり、いつまでも眺めていた。

白い航跡こうせきが消えて、元のウルトラマリン色の青い海にかえると

ころあたりに、執念しゅうねんぶかくついてきた白いかもめが五六羽、

しきりに円を描いては、漂流ひょうりゅうするごちそうめがけて、まい下

りるのが見られた。

船の舳とこが向いている方に、ぼんやりと雲か島か分らないものが見えていたが、それは陸地だと分った。左右にずつとのびている。そうだ、あれだ、イタリア半島なのだ。するとこの船はイタリア

半島のどこかの港にはいるのにちがいない。一体どこにつくのだらうか。

隆夫のたましいは、もうすっかり大胆だいたんになつていたので、ラストをはなれて下におりてきた。

そして船橋せんきようへとびこんだ。そこには船長と運転士と操舵そうたし手の三人がいたが、誰も隆夫のたましいがそこにはいつてきたことに氣のつく者はいなかつた。

その運転士が、航海日記をひろげて、何か書きこんでいるので、そばへ行つて見た。その結果、この汽船は、対岸たいがんのバリ港へ入るのだと分つた。

やがてバリ港が見えてきた。

小さな新興しんこうの港だ。カッタ口港とは全然おもむきのちがった港だった。そのかわり、町をうずめていゝ家々は、見るからに安や普請すぶしんのものばかりであつた。戦乱せんらんの途中で、ここを港にする必要が出来て、こんなものが出来上つたらしい。殺風景で、いい感じはしなかつた。

入港がまだ終らないうちに、隆夫のたましいは汽船ゼリア号にけつべつ訣別をし、風のように海の上をとび越えて、海岸へ下りた。

不潔きわまる場所だつた。見すばらしい人たちが、蠅はえの群のように倉庫の日なたの側に集つていゝ。隆夫のたましいは、ペツと唾つばをはきたいくらいだつたが、それをがまんして、ともかくも彼らの様子をよく拝見するために、その方へ近づいていつた。

一人の男が、ぼろを頭の上からまどつて棕栢しゆろの木にもたれて、ふところの奥の方をぼりぼりかいていた。隆夫のたましいは、その男の顔を見たとき、

「おやッ」

と思つた。どこかで見た顔であつた。

だいきぐう
大奇遇

隆夫たかおのたましいは、そのあわれな人物の顔を、何回となく近よ

つて、穴のあくほど見つめた、彼は、そのたびにわくわくした。「どうしても、そうにちがいない。この人はぼくのお父さんにちがいない」

隆夫の父親である一畑治明博士いち はた はる あきは かせは、永く歐洲に滞在して、研究をつづけていたが、今から四、五年前に消息をたち、生きているとも死んだとも分らなかつた。が、多分あのはげしい戦禍せんかの渦の中にまきこまれて、爆死ばくししたのであらうと思われていた。その方面からの送還そうかんや引揚者の話を聞き歩いた結果、最後に博士を見た人のいうには、博士は突然スイスに姿をあらわし、一週間ばかり居たのち、危険だからスエーデンへ渡るとその人に語つた。それで、それから後、再び博士には会わなかつたという。

では、スエーデンへうまく渡れたのであろうか。その方面を聞いてもらったが、そういう人物は入国していないし、陸路はもちろん、空路によつてもスイスからスエーデンへ入ることは絶対にできない情勢にあつたことが判明した。

そこで、博士はスイス脱出後、どこかで戦禍を受け、爆死でもしたのではなからうかという推定が下されたのであつた。

ところが今、隆夫のたましいを面くらわせたものは、イタリアのバリ港の海岸通の棕櫚しゅうろの木にもたれている男の顔が、なんと彼の父親治明博士に非常によく似ていることであつた。

「お父さん。お父さん。ぼく隆夫です」

と、隆夫のたましいは呼びかけた。くりかえし呼びかけた。

だが、相手は知らぬ顔をしていた。顔の筋一つ動かさなかつた。隆夫のたましいは失望した。

「すると、人ちがいなのだろうか」

すっかり悲観したが、なお、あきらめかねて隆夫のたましいは男の上をぐるぐるとびながら、彼のすることを見守っていた。

男は、木乃伊ミイラのように動かなかつた。棕櫚の木に背中をもたせ

かけたままであつた。ところが一時間ばかりした後、その男はすこし動いた。彼は座り直した。片坐かたざせん禅のように、片足を手でも

ちあげて、もう一方の脚の上に組んだ。それから両手を軽く握り目をうすく開いて、姿勢を正した。彼はたしかに無念無想の境きょう

地ちにはいろいろとしているのが分つた。隆夫のたましいは、これ

はなにか変つたことが起るのではないかと思ひ、ふわふわとびまわりながら、いつそう相手に注意をはらつていた。

すると、その男の頭のとつぺんのすぐ上に、ぼーッとす赤い光の輪が見えだした。ふしぎなことである。隆夫のたましいは、まわるのをやめて、それを注視ちゆうしした。

ふしぎなことは、つづいた。こんどは男の上半身の影が二重になつたと見えたが、その一つが動き出して、ふわりと上に浮いた。それはシャボン玉を夕暗ゆうやみの中にすかしてみたように、全体がすきとおりに、そして輪廓りんかくだけがやつと見えるか見えないかのものであり、形は海坊主うみぼうずのように、丸味をおびて凸凹でこぼこした頭部とうぶとおぼしきものと、両肩に相当する部分があり、それから下はだら

りとして長く裾すそをひいていた。また、頭部には二つ並んだ目のようなものがあつて、それが別々になつて、よく動いた。しかしその目のようなものは、卵をたてに立てたような形をし、そしてねずみ色だつた。

「おお、隆夫か。どうしたんだ、お前は」

と、そのあやしい海坊主はいつて、隆夫のたましいの方へ、ゆるらと寄つてきた。

「あ、やつぱり、お父さんでしたか」

隆夫のたましいは、海坊主みたいなものが、父親治明博士のたましいであることに気がついた。

ああ、なんとというふしぎなめぐりあいであろう。祖国を遠くは

なれたこのアドリア海の小さい港町で、父と子が、こんな靈的れいてきなめぐりあいをするとは、これが宿命しゆくめいのきくうちゆう一頁で、すでにきまっていたこととはいえ、奇遇中の奇遇といわなくてはなるまい。「お父さん。よく生きていて下さいました。親類でもお父さんのお友だちも、ほとんど絶望して、お父さんはもう生きてはいないだろうと噂しているんですよ。よく生きていて下さったですね」隆夫のたましいは、うれしさいっぱいで、父親のたましいにすがりついた。

「うん、みんなが心配しているだろうと思った。しかし知らせる方法もなかった。それにわしとしても、明日生命を失うか、あるいは一時間後、十分後に生命を失うかも知れず、おそろしい危険

の連続だった。いや、今も安心はしてられないのだ。それはいいが、お前はどうしたんだ。さつきから、いぶかしく思っているんだが、お前の肉体はどこにあるんだ」

父親は、心配の様子。

慈愛^{じあい}ふかい父親の心にふれると、隆夫のたましいは、悲しさの底にしずんで、

「お父さん。聞いて下さい。こうなんです」と、これまでに起ったことを、父親に伝えたのであった。

霊^{れい}魂^{こん}の研究者

すべての事情を、隆夫のたましいから聞きとつた父親治明博士のたましいは、大きなおどろきの様子を示した。

「それは、実におそるべき相手だ。そういうひどいことをする靈魂は、尋常じんじょういちよう一様いちようのものではないよ。たいへんな力を持つている奴だ。これはかんとんには行かないぞ。いつたい何者だろう」

父親のおどろきが、意外に大きいので、こんどは隆夫の方でおどろいてしまった。しかしこのとき隆夫は、父親のおどろきとなつた素因そいんのすべてを知っているわけではなかつた、披は、まだ靈魂界のことについては、ほんのわずかのことしか知らないのである

った。

「お父さん。そんなに、あの靈魂は、おそるべき奴ですか。ぼくには、何もかも、さっぱり分らないのです。いったい、靈魂というものが出たり、はいったりするのは、どういう法則に従うものでしょうか。いや、それよりも、ぼくは靈などというものが、ほんとにあることを、こんどはじめて知ったのです。お父さんは、それについて、くわしく知っているようですね」

隆夫のたましいは、次から次へとわきあがる疑問やおどろきを、父親の前にならべたてた。

「靈魂の学問は、なかなか手がこんでいるんだ。つまり複雑なのだ。古い時代にいいだされたでたらめの靈魂説から始まって、最

新の靈魂科学に至るまで、実に多数の靈魂説があるのだよ。わしは、お前も知っているとおり、せいかがく 生化学と ぶつしつこうぞうろん 物質構造論 などの方からはいりこんで、新しい靈魂科学の発見に努力して来た。その結果、わしは、靈魂なるものは、たしかに存在することを証明することができた。そればかりでなく、こうして実際に靈魂を活動させることにも成功した。そこでわしは、さらに深く靈魂科学の研究をしようと今も努力しているわけだが、残念なことに戦火に追われて、研究室をうしない、それからさすらいの旅がはじまり、いろいろな困難や災害にあつて、こんなひどい姿で食くうや食わずの生活をつづけている始末だ。ああ、わしは、早く落ちついた研究室にはいりたい。むしろこの際、日本へ帰るのが、その早

道だとも思い、こうして機会を待っているわけなんだ」

父親治明博士のたましいは、これまでの経過をかいつまんで話した。

「普通に、たましいというとな、肉体にぴったりついてるものだが、ある場合には、肉体をはなれることもあるんだ。肉体のないたましいというものも、実際はたくさんごろごろしている。そういうたましいが、肉体を持っている別のたましいに、とりつくことがよく起る。お前がさつき、わしに話をして聞かせた名津子^{なつこ}さんの場合なんか、それにちがいない。つまり、名津子さんの肉体といっしょに居る名津子さんのたましいの上に、あやしい女のたましいが馬乗りについているんだと考えていい。二つのたましい

いは、同じ肉体の中で、たえず格闘かくとうをつづけているんだ。だから名津子さんが、たえず苦しみ、好きなことを口走るわけだ」

「なるほど、そうですね」

「名津子さんの場合は、普通よくあるやつだ。しかしお前の場合、非常にかわっている。お前を襲撃しゅうげきした男のたましいは、お前の肉体からお前のたましいを完全に追い出したのだ。そういうことは、普通、できることではないのだ。だから、さつきもいったように、その男のたましいなるものは、非常にすごい奴にちがない。いったい、何奴なにやつだろう」

治明博士は、再びおどろきの色をみせて、そういった。

隆夫のたましいは、父親のいうことを聞いていて、なんだか少

しずつわけが分つてくるように思った。と同時に、また別のいろいろの疑問がわいてきた。ことに、彼が信用しかねたものは、たましいの姿のことであつた。目の前に見る父親のたましいは、海坊主が白いきれを頭からかぶつて、それに二つの目をつけたような姿をしている。ところが、隆夫の実験小屋へはいつて来て、彼のたましいを追い出し、彼の肉体を奪つた怪物は、ちやんと男の姿をしていた。同じたましいでありながら、なぜこのように、姿がちがうのであろうか。この疑問を、父親にただしたところ、父親のたましいは、次のように答えた。

「たましいというものはね。たましいの力次第しだいで、いろいろな形になることが出来る。実は、本当は、たましいには形がないもの

だ。まるで透明なガス体か、電波のように。が、しかし、たましいには個性こせいがあるので、なにか一つの姿に、自分をまとめあげたくなるものだよ。これはなかなかむずかしい問題で、お前にはよく分らないかも知れないが、お前は、自分で知っているかどうかしらんが、お前はおたまじやくしのような姿をしているよ。つまり日本の昔の絵草紙えぞうしなんかに出ていた人間と同じような姿なんだ。これはお前が、たましいとは、そんな形のものだと前から思っていたので、今はそういう形にまとまっているのだ」

「へえーッ、そうですかね」

と、隆夫は、はじめて自分のたましいの姿がどんな恰好かっこうのものであるかを知って、おどろき、且かつあきれた。

「それはいいとして、お前の肉体を奪った悪霊を、早く何とか片づけないといけない」

父親治明博士は苦しそうに喘いだ。

城壁の聖者

その夜、するどくどがった新月が、西空にかかっていた。

ここはバリ港から奥地へ十マイルほどいったセラネ山頂にある
アクチニオ宮殿の廃墟であった。そこには山を切り開いて盆地

が作られ、そこに巨大なる大理^{だいり}石材^{せきざい}を使つて建てた大宮^{だいきゆう}殿^{でん}があつたが、今から二千年ほど前に戦火に焼かれ、碎かれ、そのあとに永い星^{せい}霜^{そう}が流れ、自然の力によつてすさまじい風化^{ふうか}作用^{さよう}が加わり、現在は昼間でもこの廢墟に立てば身ぶるいが出るという荒れかたであつた。

しかも今宵^{こよい}は新月がのぼつた夜のこととて、崩^{くず}れた土台やむなしく空を支^{ささ}えている一本の太い柱や首も手もない神^{しん}像^{ぞう}が、冷たく日光を反射しながら、聞えぬ声をふりしぼつて泣いているように見えた。

一ぴきの狼が突如として正面に現われ、うしろを振返つたと思ふと、さつと城壁のかげにとびこみ、姿を消した。いや、狼では

なく、飢えたる野良犬のらいぬであつたかも知れない。その犬とも狼ともつかないものが振返つた方角から、ぼろを頭の上からかぶつた男がひとり、散乱さんらんした円柱や瓦礫かわらの間を縫つて、杖をたよりにとぼとぼと近づいてきた。

彼は、たえず小さい声で、ぼそぼそと呟つぶやいていた。

「……しつかり、ついてくるんだよ、わしを見失つては、だめだよ。……もうすぐそこなんだ。多分見つかると思うよ。アクチニ才四十五世さ。新月の夜にかぎつて、廃墟の宮殿の大広間に、一統と信者たちを従えて現われ、おごそかな祈りの儀式を新月にささげるのだよ。……隆夫、わしについてきているのだろうね。……：そうか。おお、よしよし。もうすこしの辛抱だ。わしはきつと

「アクチニオ四十五世を探し出さしにやおかない」

と男は、杖をからんからんとならしながら、空に向つて話しかける。

彼こそ、隆夫の父親の治明博士であつたことはいうまでもない。彼は、奇くしきめぐりあいをとげた愛あいそく息隆夫のうつろな靈魂をみちびきながら、ようやくこれまで登つてきたのである。

隆夫のたましいは、どこにいる？

彼の姿も形も、まるでくらげを水中にすかして見たようで、はつきりしないが、治明博士の頭上、ややおくれ勝ちに、丸味をもつた煙のようなものがふわふわとついて来るのが、それらしい。

博士は、杖を鳴らしながら、はいきよ廃墟の中を歩きまわつた。大円

柱が今にもぐらツと倒れて来そうであつた。宙にかかつたアーチが、今にも頭の上からがらがらどツと崩れ落ちて来そうであつた。博士は、そういう危険をもともせず、土台石の山を登り、わずかの間隙かんげきをすりぬけて、アクチニオ四十五世たちの祈禱場きとうじょうをなおも探しまわつた。どこもここも墓場はかばのようにしずかで、祈りの声も聞えなければ、人の姿も見えなかつた。

博士は、泣きたくなる心をおさえつけながらもよろめく足を踏みしめて、なおも廢墟の部屋部屋をたずねてまわるのだった。

「あ、あそこだ！」

とつぜん博士は身体をしやちこばらせた。博士は目をあげて見た。そこは西に面した高い城壁の上であつたが、あわい月光の下、

人影とおぼしきものが数十体、まるで将棋しょうぎの駒こまをおいたように並んでいるのであつた。

だが、誰一人として動かない。何の声も聞えて来ない。明かり一つ見えない。

それでも、それがアクチニオ四十五世のいちだん一団であることを認めめた。博士は急に元気づき、その方へ足を早めていった。博士は、間もなく高い壁に行方を阻はばまれた。が博士は、すこしもひるむことなく、城じょう壁へきの崩れかけた斜しゃ面めんに足をかけ手をおいて、登りだした。

時間は分らないが、やっと博士は城壁を登り切つた。二時間かかったようでもあり、三十分しかかからなかつたようでもあつた。

「ああ……」

博士は眼前がんぜんにひらける巖げん 肅しゆくなる光景にうたれて、足がすくんだ。

城壁の上の広場に、約四五十人の人々が、しずかに月に向つて、無言むごんの祈いのりをささげている。一段高い壇だんの上に、新月を頭上に架かけたように仰いで、ただひとり祈る白衣はくゐの人物こそ、アクチニオ四十五世にちがひなかつた。

博士は、すぐにも聖者せいじゃの足許あしもとに駆かけよつて、彼の願ねがい事を訴うえるつもりであつたが、それは出来なかつた。足がすくみ、目がくらみ、動悸どうきが高鳴つて、博士はもう一步も前進をすることが出来なかつたのである。

博士は石床いしどこの上にかけて、化石かせきになつたように動かなかつた。それから幾時間も動くこともできず、博士はそのままの形でいた。博士は氣を失つていたので、睡つていたのでない。博士はその間その姿勢ではとても見ることできないはずの、聖なる新月の神々こうごうしい姿を心眼の中にとらえて、しっかりと拝おがんでいたのだ。

風が土砂どしやをふきとばし、博士の襟えりもと元にざらざらとはいつて来た。どこかで鉦しょうの音がするようだ。

「顔をあげたがよい」

さわやかな声が、博士の前にひびいた。

はっと、博士は顔をあげた。

「あ、あなたはアクチニオ四十五世！」

ロザレの遺骸いがい

いつの間にか、聖せい者じゃは博士の前に近く立っていた。ふしぎである。博士は、自分の現在の居場所を知るために、あたりに目を走らせた。依然いぜんとして、同じ城壁の上に居るのであった。だが、アクチニオ四十五世のうしろに並んで新しん月げつを拝んでいた同形どうけいの修行者たちはただの一人も見えなかった。残っているのは、聖

者ただひとりであった。

「ああ、聖者……」

「分っている。わしについて来れ^{きた}」

聖者は博士の願いについて一言も聞かず、自分のうしろに従^{したが}い来れといったのだ。博士は、奇蹟に目をみはりながら、石床^{いしどこ}をけつて立つた。聖者は氣高く後姿を見せて、しずかに歩む。博士はその姿を見失うまいとして、後を追つていった。そのとき氣がついたことは、新月は既に西の地平線に落ちて、あたりは濃い闇の中にあつたことである。しかもふしぎに、聖者の後姿と、通り路とは、はつきり博士の目に見えているのだった。

博士は聖者アクチニオ四十五世について城壁の上をずんずんと

歩いていくうちに、いつしかトンネルの中にはいつているのに気がついた。うす暗い、そして奥が知れない、気味のわるいトンネルであった。トンネルの道は、自然に下り坂になって、今歩いているところは既に地下へもぐってしまったらしく、プーンとかびくさい。

どこからともなく、黄いろのうす明りがさし、トンネルの中の有様を見せてくれる。トンネル内は、通路が主であるが、ところどころそれが左右へひろげられて大小の部屋になっていた。そしてその部屋には、土や石で築いた寝台のようなものがあり、壁にはさまざまの浮き彫りで、絵画や模様らしきものや不可解な古代文字のようなものが刻まれてあった。

聖者はずんずんと奥へはいつていつたが、そのうちに、一つの大きな丸い部屋のまん中に見えているりっぱな大理石の階段を下りていった。博士も、もちろんあとに従った。

「あ……」

博士は、階段を途中まで下りて、その下に見えて来た地下房ちかぼうの異様な光景に思わずおどろきの声を発した。

そこには、意外にも、たくさんの人が集っていた。そのほとんど皆が、壁にもたれて立っていた。みんなやせていた。そして燻く製んせいの鮭さけのように褐かつしよく色いろがかった。

既に下り切っていた聖者が、治明博士の方へふり向いて、早く下りて来るようにとさし招いた。

今は、博士は恐ろしきも忘れ、下りていった。

聖者アクチニオ四十五世は、自分の前において、壁にもたれて
いるミイラのような人間を指し、

「わが弟子^{でし}たりしロザレの遺骸^{いがい}である。これを汝^{なんじ}にしばらく貸し
与える」

「えつ、この人を——この遺骸をお貸し下さるとは……」

と、治明博士は、問いかえした。

「今、ロザレの霊魂^{れいこん}は他出している。されば後、ロザレの遺骸
に汝の子の隆夫のたましいを住まわせるがよい」

「あ、なるほど。すると、どうなりますか……」

「生きかえりたるロザレを伴い、汝は帰国するのだ。それから先

のことは、汝の胸きょううちゅう中に自ら策がわいて来るであろう。とにかくわれは、汝ら三名の平安のために、今より呪文じゆもんを結ぶであらう。しばらく、それに控ひかえていよ」

「ははッ」

治明博士は、アクチニオ四十五世の神秘しんぴな声に威圧いあつせられて、はッと、それにひれ伏ふした。

聖者は、不可解なことばでもって、ロザレの遺骸いがいに向つて呪じゆも文ぶんを唱えはじめた。呪文の意味はわからないが、治明博士は、自分の身体の関節かんせつが、ふしぎにもぎしぎしときしむのに気がついた。

（汝ら三名の平安のために——と、聖者はいわれた。汝ら三名と

は、いったい誰々のことであろう」と、治明博士は、ふと謎のこ
とばを思い出していた。自分と、それから——そうだ、隆夫のこ
とだ。隆夫は、どうしてであるだろうか。さつき城壁の上に聖者
の姿を拝してから、自分の心は完全に聖者のことではいっぱいな
って、隆夫がついて来ているかどうかをたしか確認することをおこた怠っていた。
隆夫はどうしているだろうか。——いやいや、万事は、聖者が心
得ていて下さるのだ。とうと尊き呪文がなされているその最中に、他の
事を思いわずらっては、聖者に対し無礼ぶれいとなるのは分り切ってい
る。つつし慎まねばならない。

呪文の最後のことばが、高らかに聖者の口から唱えられ、その
ために、この部屋全体が異様な響をたて、それに和して、何百人

何千人とも知れない亡^{ぼうれい}霊の祈りの声が聞えたように思った。治明博士は、気が遠くなつた。

「これ、起きよ、目ざめよ。旅の用意は、すべてととのつた。これいち は た は る あ き一畑治明。汝の供は、既に待つてゐるぞ。早そうそう々、連れ立つて、港へ行け」

聖者の声は、澄みわたつて響いた。治明博士ははつと気がついて、むくむくと起上ると、あたりを見まわした。

そこは、はじめ登つていた域壁の上であつた。夜は既に去り、東の空が白んでいた。そこに立つてゐるのは治明博士ただひとり……いやもう一人の人物がいた。

「君は」

と、治明博士は、横に立っていたかっしよく褐色の皮膚を持ったや痩せた男へおどろきの目を向けた。どこかで見た顔ではあるが……。

「お父さん、ぼくですよ。隆夫ですよ。ぼくは、さつきから、このとおりロザレの肉体を貸してもらっているのです。これで元気になりましたから、早く戻ることによいよ」

と、そのミイラの如き人物は、博士に向ってなつかしげに話しかけたのであった。

帰きこく国

親子は、その後、バリ港を船で離れることができた。その船はノールウェイの汽船で、インドへ行くものだった。

コロンボで、船を下りなくてはならなかった。そしてそこで、更に東へ向う便船を探しあてることが必要だった。親子は、慣れない土地で、新しい苦勞を重ねた。

この二人を、ほんとの親子だと氣のつく者はなかった。そうであらう、はるあきはかせ治明博士の方は誰が見でも中年のとうようじん東洋人であるのに對し、ロザレの肉体を借用している隆夫の方は、青い目玉がひどく落ちこみ、鼻は高くて山の背のように見え、その下にすぐ唇があつて、やせひからびたきんとうじん近東人だ。頭巾ずきんの下からは、とびいろ鳶色の

縮れ毛ちぢりがもじやもじやとはみ出している。パンツの下からはみ出ている脛すねの細いことといったら、今にもほきんと折れそうだった。

しかし結局、隆夫のおかげで、治明博士はインドシナへ向う貨物船に便びんじょう乗することができた。それはロザレの隆夫を聖者に仕立て、すこしもものをいわせないことにし——しやべれば隆夫は日本語しか話せなかつた——治明博士はその忠ちゆうじつ実じつなる下僕しもべとして仕えているように見せかけ、そのキラマン号の下級船員の信用を得て、乗船が出来たのであつた。もつとも密航するのだから、親子は船せんそう艙すみの隅すみつこに窮きゆううくつ屈くつな恰好をしていなければならなかつた。

キラマン号をハノイで下りた。

それからフランスの飛行機に乗つて上海^{シャンハイ}へ飛んだ。そのとき親子は、小ぎつぱりとした背広に身を包^{つつ}んでいた。

上海から或る島を経由^{けいゆ}してひそかに九州の港についた。いよいよ日本へ帰りついたのである。バリ港を親子が離れてから八十二日目のことであつた。

「よくまあ、無事に歸つて来られたものだ」

「やってみれば、機会をつかむ運にも出会うわけですね」

親子は、休むひまもなく自動車を雇つて、そこから山越えをしつたのであるが、それは避^さけた。つたのであるが、それは避^さけた。

三日ほど身体を休ませたのち、いよいよ親子は東京へ向つた。

これからがたいへんであった。親子の間には、ちゃんと打合わせがついているものの、果してそのとおりうまく行くかどうか分らなかった。もしどこかで尻尾しっぽをおさえられたが最後、えらいさわぎが起るにちがいはなかった。ことに隆夫は、むずかしい大芝居を演じえんおおせなくてはならないのであった。それもやむを得ない。おそるべき妖ようりよく力を持つあの靈魂第十号をうち倒して、隆夫が損そんしょう傷なく無事に元の肉体をとり戻すためには、どうしてもやり遂げなくてはならない仕事だった。

親子は連れ立って、なつかしいわが家にはいった。それは日が暮れて間もなくのことであつた。

隆夫の母は、おどろきとよろこびで、気絶きぜつしそうになつたくら

いだ。しかしそれは、隆夫を自分のふところへとりもどした喜びではなくて、もはや亡なくなつたものとあきらめていた夫の治明が、目の前に姿をあらわしたからであつた。

「まあ、わたし、夢を見ているのではないかしら……」

「夢ではないよ。ほら、わしはこのとおりぴんぴんしている。苦勞を重ねて、やっと戻つてきたよ」

「ほんとですね。あなたは、ほんとに生きていらつしやる。ああ、なんとありがたいことでしょう。神さまのお護まもりです」

「隆夫は、どうしているね」

治明博士は、かねて考えておいた段取だんどりのとおり、ここで重大なる質問を發した。

「ああ、隆夫……隆夫でございますが……」

と、母親はまっ青になって、よろめいた。治明博士は、すばやく手を貸した。

「しつかりおしなさい。隆夫はどうかしたのですか」

「それが、あなた……」

「まさか隆夫は死にやすまいな」

治明博士の質問が、うしろの闇の中に立っている隆夫の胸にどきんとひびいた。もし死んでいたら、隆夫は再び自分の肉体を手に入れる機会を、永久に失うわけだ。母親は、どう応えるであろうか。

「死にはいたしませぬ」

母親の声は悲鳴に似ている。

しかしそれを聞いて隆夫は、ほつと胸をなでおろした。機会は
今後に残されているのだ。それなれば、ミイラのような醜骸しゅうがい
を借りて日本へ戻つて来た甲斐はあるというものだ。

「……死にはいたしませぬが、少々ふしまつ不始末があるのでございます」
「不始末とは」

「ああ、こんなところで立ち話はなりませぬ。さ、うちへおはいりになつて……」

「待つて下さい。わたしにはひとりの連れつがある。その方はわたしの恩人です。わしをこうして無事にここまで送つて来て下さつた大恩人なんだ。その方をうちへお泊め申さねばならない」

母親はおどろいた。治明博士の呼ぶ声に、隆夫は闇の中から姿をあらわし、なつかしい母親の前に立った。

（ああ、いたわしい）

母親は、しばらく見ないうちに別人のようにやせ、頭髮には白いものが増していた。

「レザールさんとおっしゃる。日本語はお話しにならない。尊とうとい聖者でいらっしゃる。しかしお礼をのべなさい。レザールさんは聖者だから、お前のまごころはお分りになるはずである」

母親はおそれ入って、その場にくぐも頭をさげて、夫の危難を救ってくれたことを感謝した。

隆夫はよろこびと、おかしさと、もの足りなさの渦うずまき巻の中に

あつて、ぼーツとしてしまった。

その後の物語

昔ながらの親子三人水いらずの生活が復活した。だが、それは奇妙な生活だった。これが親子三人水いらずの生活だということ
 は、治明博士と隆夫だけがわきまえていることで、母親ひとり
 その外におかれていた。世間のひとたちも、いち畑はたさんのお家は、
 ご主人が帰つてこられ、奥さんはおよろこびである。ご主人がい

ンド人みたいなこわい顔のお客さんを引張つてこられて、そのひとが、あれからずっと同居している——と、了解りようかいしていた。

隆夫は、めつたに主家おもやに顔を出さなかった。それは治明博士が隆夫のために、例の無電小屋を居住すまい宅いにあてるよう隆夫の母親にいつけたからである。そこに居るなら、隆夫は寝言ねごとを日本語でいつてもよかった。なにしろ、事件がうまい結けつ着ちやくをみせるまでは、母親をもあざむいておく必要があつたから、隆夫はなるべく主家へ顔出しをしないのがよかつたのである。隆夫には、たいへんつらい試練しれんだつた。

もう一人の隆夫は、どうしていたらう。隆夫の肉体を持った靈魂第十号は、今どうしているか。

母親は、そのてんまつを治明博士に次のように語った。

「隆夫が、あなた、急に女遊びをするようになってしまいましたね。監督の役にあるわたくしとしては、あなたに申しわけもないんですが。いくらわたくしが意見をして、さっぱりきかないんです。もつとも女遊びといつても悪い場所へ行つて札つきの商売女をどうこうするのではなく、隆夫のは、お友達の家のお嬢さんと出来てしまったわけで、げひん下品でも不潔ふけつでもないんですけれど、やはり女遊びにちがいありません。まことに申しわけのないことになってしまいました。

そんなわけで、隆夫はわたくしと考えがあいませんで、今はこの家に居ないのでございます。早くいえば、家出をしてしまった

んです。でも隆夫の居所ははつきりしていません。それは今お話しした相手のお嬢さんのお家なんですの。三木さんといひまして、隆夫と仲よしの健けんさんのお家なんです。相手のお嬢さんというのが、健さんの姉さんで名津子なつこさんという方です。つまり同級生のお姉さまと恋愛関係に陥おちてしまつたわけですの。名津子さんは二十歳ですが、隆夫は十八歳なんですから、相手の方が二つも年齢が上になつています。いいことだと思ひません。どうして隆夫が、そんな軟派なんぱせいねん青年になつてしまつたのか、もちろんわたくしにも監督上ゆだんがあつたわけでございませうけれど、まさしく悪魔まゐに魅みられたのにちがいありません。

二人が結びついたきつかけは、名津子さんの発病でございまし

た。いいえ、名津子さんは、それまではたいへん健康にめぐまれた方でしたが、あるとき急におかしくなつてしまいましたね、健さんもたいへんな心配、それよりもお母さんはもつとたいへんなご心配で、名津子さんといっしょにおかしくなつてしまいそうに見えました。それを聞いた隆夫は、自分が研究して作った器械を使つて、名津子さんの病気をなおしてあげたいといつて、その器械を持つて三木さんのお家へ出かけたのでございますよ。その日歸つて来ての短い話に、『お母さん、どうやら病氣の原因の手がかりをつかんだようですよ。二三日うちに、きつとうまく解決してみせます』と隆夫が申しました。それから隆夫は、いつもの通り、電波小屋へはいったわけですが、隆夫がおかしくなつたとは

つきり分つたのは、その翌朝のことでございました。

その朝、隆夫はいつもとはかわつて、たいへん機嫌がよく、そして大元気で——すこしそのふるまいが乱暴すぎるようにも思われたこともありましたが——とにかくすばらしい上機嫌で、『これから三木さんのところへ行つて、名津子さんの病気をなおします。病気がなおったらぼくは名津子さんと結婚します。ぼくはこの家よりも名津子さんの家の方が好きだから、あつちに住みます。では、行つてきます』と途方もないことを口走ると、わたくしが追いつがるのをふり切つて、家を出ていつてしまったんです。それつきり、隆夫はうちへ戻つて来なくなりました。そのときのことを思い出しますと、今も胸がずきずき痛んでなりません。

隆夫がおかしくなったので、わたくしはおどろきと悲しみのあまり、病人のようになって寝ついてしまつて、一步も歩けなくなりました。しかしわたくしよりも、もつとびつくりなすつて、と當惑うわくなすつたのは、名津子さんのお家の人々でした。とりわけお母さまの驚きは、お察し申しあげるだに、いたましいことでした。なにしろ、とつぜん隆夫が乗りこんでいって、名津子さんに抱きつき、そして『ぼくは只今から名津子さんと結婚します。そしてぼくは名津子さんと、ここに住みます』と宣言したというではございませんか。いくら顔見知りの青年であつても、こんなあつかましいことをいって、しかもそれを目の前で実行してみせる心臓つぷりには、お母さまが卒倒なすつたというのも無理ではありま

せん。

それ以来、隆夫はあのお家から離れないのです。誰から何といわれようと、隆夫はすこしも気にしていないらしく、にやにや笑うだけで言葉もかえさず、その代り、忠実な番犬のように名津子さんのそばから離れないのです。しかしふしぎなことに、名津子さんの病気は、ぴったりと癒^{なお}つてしまいました。前のようにちやんとおとなしくなり、いうこともへんではなくなりました。二人の仲は、たいへんいいのです。そのかわり、この事件のてんまつは世間にひろがり、すごい評判になりました。もちろん隆夫は、退校^{しよぶん}処分にされました。でも隆夫は平気でいます。今の今も、わたくしは隆夫の気持が分らないで、悩んでいるのでございます」

隆夫の母親は目頭めがしらをおさえた。

公開実験の日

ある日、治明博士は、困った顔になって、電波小屋でんぱごやへはいつて来た。

レザール聖者——実は隆夫のたましいは、待ちかねていたという風に椅子から立上つてきて、父親を迎えた。

「困ったことになったよ、隆夫」

治明博士は、まゆをひそめて、すぐその話を始めた。

「どうしたのですか、お父さん」

「わしはお前を救うために、こうして日本へ帰って来たんだ。ところが、わしが帰って来たことが広く報道されたため、わしは今方々から講演をしてくれと責められて断ことわるのによわっている」

「断れば、ぜひ講演しろとはいわないでしょう」

「それはそうだが、中にはどうにも断り切れないのがある。心しんれ霊いがつかい学会がのいがそれだ。あそこからは洋行の費用ももらっている。

それにお前のことがもう大した評判なんだ。いや、お前というよりも、聖者レザール氏をわしが連れて来たということが大評判なんだ。ぜひその講演会で、術をやってみせてくれとの頼みだ。こ

れにはよわっちまった」

「それは困りましたね。ぼくには何の術も出来ませんしねえ」

親子はしばらく黙つて下を向いていた。やがて治明博士がいいにくそうに口を開いた。

「どうだろうなあ、心靈学会だけに出るといふことに讓歩じょうほして、一つ出てももらえないかしらん」

「出てくれて、ぼくに何をしろとおっしゃるのですか、お父さん」

隆夫のたましいはおどろいて問い返した。

「何もしなくていいんだ。ただ、舞台に出て目を閉じてじつとじていてもらえばいい。何をいわれても、はじめからしまいまで黙

つていてもらえばいいんだ。それならお前にもできるだろう」

「それならやれますが、しかしそれでは聴衆ちようしゆうが承知しないでしよう。ぼくばかりか、お父さんもひどい攻撃をうけるにきまつていますよ」

「うん。しかしそのところはうまくやるつもりだ。お父さんもやりたくないんだが、心靈学会ばかりは義理があつてね、どうにも断りきれないのだ。お前もがまんしておくれ」

こんなわけで、隆夫のたましいは、はじめて公開の席に出るこ
とになった。彼は不安でならなかった。が、「はじめからしま
いまで黙っていればいいんだ」という父親との約束を頼みにした。

一畑治明博士の帰国第一声講演及び心靈実験会——という予告

が、心靈学会の会員に行きわたり、会員たちを昂奮させた。新聞社でもこの治明博士の帰国第一声を重視して紙上に報道した。だから会場は当日、会員以外に多数の傍聴人が集り、五千人の座席が満員になってしまった。

治明博士の講演は「ヨーロッパに於ける心靈研究の近況」というので、博士が身を多難たなんにさらして、各地をめぐり、心靈学者や行ぎようじや者に会い、親しく見聞し、あるいは共に研究したところについて概がいりやく略をのべた。それによると、心靈の实在と、それが肉体の死後にも独立に存在すること、そして心靈と肉体とがいつしよになつてゐる、いわゆる生存中も靈魂と肉体との分離が可能であると信ぜられてゐるそうである。更に博士は、一步深く進ん

で心しん靈れい世界せかいのあらましについて紹介した。

聴衆は熱心に聴講した。会員たちはもちろんのこと、傍聴人たちも深く興味をおぼえたらしい、講演後の質問は整理に困るほど多かつた。しかし時間が限られているので、それをあるところまで打切つて、いよいよ聖者レザール氏をこの舞台へ招くことになった。来会者一同は、嵐のような拍手をもつていよいよ始まる心霊実験に大関心を示した。

治明博士は、聖者を迎える前に、レザール氏の身み柄がらと業ぎ績ようせきについて述べた。これは実は博士のデタラメが交つていたが、一部分はアクチニオ四十五世の下に集っている行者団のことを述べたので、かなり実感のある話として聴衆の胸にひびいた。

舞台には、このときせいだん聖壇が設けられた。白い布で被おほい、うしろには衝ついたて立がおかれ、それには奇怪なる刺繡ししゅうえ絵がかけられた。これは治明博士があちらで手に入れたもので、多分イランあたりで作られたらしい豪華なものである。それからその前に、法王の椅子が置かれた。

そのとき舞台の裏で、奇妙な調子の楽器が奏しはじめられた。東洋風の管楽器の集合のようであった。それは音色ねいろが高からず低からず、そしてしずかに続いてやむことがなく、聴きいつているうちにだんだん自分のたましいがぬけ出していくような不安さえ湧いて来るのであった。

いったん退場した治明博士が、再び舞台へ現われた。しずかな

足取り、敬^{けい}虔^{けん}な面持で歩をはこんでいる。と、そのあとから聖者レザール氏の長身が現われた。僧^{そう}正^{じょう}服^{ふく}とアラビア人の服とをごつちやにしたような寛^{かん}衣^いをひっかけ、頭部には白いきれをすつぽりかぶり、肅^{しゅく}々^{しゅく}と進んで、聖壇にのぼり、椅子に腰を下ろした。聴衆の間からは、溜^ため息^{いき}が聞えた。つづいて嵐のような拍手が起つたが、聖者はそれに答えるでもなく、席についたまま石のように動かず、目を閉じたまま、ただ、とび出た高い鼻を、かぶりものの布がかかるく叩いていた。どこからか風が舞台へ吹いて来るものと見える。

さて、いよいよこれより治明博士一世一代の大芝居が始まることになった。果してうまく行くかどうか、千番に一番のかねあい

だ。

奇蹟きせき起る

もう度胸をきめている治明博士だった。彼はまず聴衆に向つて、これより聖せいじや者レザール氏をわずらわして心霊実験を行うとアナウンスし、

「但し、聖者のおつとめはかなり忙しく、こうしているうちにも多数の心霊の訪問を受けて一々応おうたい待しなければならぬので、

只今すぐに実験をお願いして、即座にそれが諸君の前に行われるかどうか疑問である。聖者のおつとめの合間をつかむことができたら、諸君は運よく実験を見ることが出来るわけだ。その点よく御了解ごりようかいを得たい」

と、巧みにことわりを述べて、伏線ふくせんとした。

「それでは、まず第一番として、聖者をお願いして、私の肉体と私の靈魂とを分離して頂くことにします」

博士はついに、こういって、実験を始めたのである。これは実は、博士が修業によつて会得えとくして来た術であつて、なにも聖者をおぼろげなくとも、博士ひとりで出来ることであつた。博士として、これだけは確実に来会者をはつきりおどろかせることが

出来る自信があり、これさえ成功するなら、あとの実験はたといふことごとく失敗に終つても、もうしわけ申 訳がつかうと考へていた。

そこで博士は、うやうやしく壇だんの前にいつて礼拝をし、それから立上つた。博士の考へでは、それから聖者に後向きとなつて聴衆の方を向いて座し、それから肉体と心霊ぶんりじゆつの分離術に入るつもりだつた。

ところが、博士の思つてもいないことが、そのときに起つた。というのは、壇だんじよう上の聖者レザールが、博士に向つて手を振りだしたのである。

「汝なんじは下がれ。あちらに下がれ」

レザールは舞台の下手を指した。

博士はおどろいた。隆夫がなにをいい出したやらと、びっくりした。しかも「汝はなんじ下がれ」といったのはギリシア語だったではないか。隆夫がギリシア語を知っているとは今まで思ったこともなかった。

「お前は、だまって、じつと黙っているがいいよ。あとはわしがつまぐやるから」

と、治明博士は近づいて、それをいおうとしたのだ。ところがどうしたわけか、博士は声が出せなかった。そして全身がカッとなり、じめじめと汗がわき出でた。

「汝は、しずかに、見ているがよい」

レザールは重ねていった。

と、博士は何者かにりようわき両脇から抱えあげられたようになり、自分の心に反して、ふらふらと舞台を下手へ下がっていった。そしてそこにおいてあつた椅子の一つへ、腰を下ろしてしまった。

来会者席からは、しわぶき一つ聞えなかつた。みんなきんちよう緊張

の絶頂ぜつちようにあつたのだ。誰もみな——治明博士だけは例外とし

て——聖者レザールがげんしゆく厳粛な心靈実験を始めたのだと思つて

いたのだ。このとき、舞台裏で、例の奇妙な楽器が鳴りだした。

うら恨むような、泣くような、ちよう腸の千切れるようなあいちよう哀調をおびた

樂の音であつた。来会者の中には、首すじがぞつと寒くなり、思

わず襟えりをかきあわす者もいた。

今や場内はいよう異様なようき妖気に包まれてしまつた。これが東京のまん

中であるとは、どうしても考えられなかった。

そのとき、らいかいしゃ来会者がざわめいた。

階下の正面の席から、ぬつと立ち上った青年がいた。その青年は、ふらふらと前に歩きだしたのだ。近くの席の者は見た。その青年の目は閉じていたことを。

青年はまっすぐに歩きつづけたので、ついに舞台の下まで行きついた。そこで行きどまりとなったと思ったら、青年の身体がすーッと煙のように上にのぼった。あれよあれよと見るうちに、青年は舞台の上に自分の足をつけていた。

らいかいしゃせき来会者席は、ふたたび氷のような静けさに返った。今見た

ふしぎな現象について、適確な解釈を持つひまもなく、次の奇蹟

が待たれるのであった。かの青年は、亡^{ぼうれい}霊の如くすり足をして、聖者の席に近づきつつあった。

このときの治明博士の焦^{しょうそう}燥と驚^{きよう}愕^{がく}とは、たとえるもの

のないほどはげしかった。彼は席から立つて、舞台のまん中へとんでいきかかった。だが、どういうわけか、彼の全身はしびれてしまつて、立つことができなかつた。そのうちに彼は、重大な発見に、卒^{そつとう}倒しそうになつた。というのは、客席から夢遊病者のようにふらふらと舞台へあがつて来た青年こそ、隆夫にそっくりの人物だったからだ。

「これはことによると、えらいさわぎをひき起すことになるぞ」
治明博士は青くなつて、舞台を見入つた。

隆夫に似た青年は、ついに聖者の前に棒立ちぼうだちになった。

すると聖者はやおら椅子から立上った。そして両手りょうてをしずかに肩のところまであげたかと思うと、両眼りょうがんをかつと見開いて、自分の前の青年をはつたとにらみつけ、

「けけッけッけ」

と、鳥の啼なきごえ声のような声をたてた。

そのとき来会者たちは、聖壇の上に、無声むせいの火花のようなものがとんだように思ったということだ。が、それはそれとして、聖者ににらみつけられた青年は、大風おおかぜに吹きとばされたようにうしろへよろめいた。そしてやっと踏み止とどまったかと思うと、これまた奇妙な声をたて、そしてその場にぱったりと倒れてしまった。

奇蹟はまだつづいた。このとき聖者の身体から、絢爛たる着衣がするすると下に落ちた。と、聖者の肉体がむき出しに出た。が、それは黄いろく乾からびた貧弱ひんじやくきわまる身体であった。聖者の顔も一変して、猿の骸骨がいこつのようになっていた。聖者の身体はスーツと宙に浮いた。と見る間に、聖者の身体は瞬間しゆんかん金色に輝いた。が、その直後、聖者の身体は煙のように消え失せてしまった。

聖者せいじゃの声

この奇怪なる出来事の間、場内は墓場はかばのようにしずまりかえつていた。

また、治明博士は、この間、目は見え、耳は聞えるが、ふしぎに声が出ず、五体は金しぼりになったように、舞台の上の肘かけ椅子の上に密着していて、動くとができなかつた。ただ、その間に、博士は天の一角いっかくからふしぎな声を聞いた。

「……：汝の願いは、今やとげられた。汝の子の肉体から、呪のろわれたる靈魂は追つい放ほうせられ、汝の子の靈魂がそれにかわつて入り、すべて元のとおりになった。これで汝は満足したはずである。さらば……」

その声！ その声こそ、聖者アクチニオ四十五世の声にちがひなかつた。

「ははあ。かたじけなし」

と治明博士は心の中に感謝を爆発させて、アクチニオ四十五世の名をたたえた。そのときに、高き空間を飛び行く聖者の姿が見えた。聖者は白い衣を長く引き、金色の光に包まれていた。その右側に、やせこけた色の黒い人物がつき従っていた。それは殉じゆん教きょう者しやロザレにまぎれもなかつた。聖者アクチニオ四十五世の左手は、ふわふわとした絹わたのようなものを掴つかんでぶら下げていた。よく見ると、その絹わたのようなものの中には、二つの眼のようなものが、苦しそうにぐるぐる動いていた。それこそ、永

らく隆夫やその両親や友人たちにわずらいをあたえていた所謂いわゆる 靈魂第十号にちがいがなかった。

大会堂をゆるがすほどの大拍手が起った。そのさわぎに、治明博士は吾れにかえった。アクチニオ四十五世も、ロザレや靈魂第十号の幻げんえい影も、同時にかき消すように消え失せた。

大感激の拍手は、しばらく鳴りやまなかつた。来会者の中には、拍手をしながら席を立てて舞台の下へ駆けだして来る者もあつた。

治明博士は、呆然ぼうぜんとしていた。

この場の推移すいを見ていて、どうにもじつとしていられなくなつた司会者が、楽屋からとび出して来て、治明博士の前に進んだ。またもや割れるような満場の拍手だつた。

「先生。来会者たちは大感激しています。そして、姿を消した聖者レザールをもう一度聖台へ出してほしいと、熱心に申入れて来ます。どうしましょうか。とりあえず、先生はあの壇の前へ行つて、立つて下さいまし」

司会者は、早口ながら、半ばなか歎願たんがんし、半ば命令するようにつた。

「私が万事心得ばんじています」

治明博士は、ようやく口を開いた。そしてよろよろと立上ると、舞台を歩いて、聖者レザールを座らせてあつた壇の方へ行つた。そこで博士は、当然のこととして、壇の前に倒れている若い男の身体に行きあつた。博士の靴の先が、その男の身体にふれると、

その男はむくむくと起き上った。そして博士の顔を凝視ぎようしすると、

「おお、お父さん」

と叫んで、治明博士に抱きついた。

博士はふらふらとして倒れそうになつたが、やっと踏みこたえた。そして口の中で、アクチニオ四十五世の名をくりかえし、となえた。

「お父さん。ぼくは元の身体に帰ることができましたよ。よろこんで下さい」

「ほんとにお前は元の身体へ帰つて来たのか」

「ほんとですとも。よく見て下さい。何でも聞いてみて下さい」

「ほんとならしいね。アクチニオ四十五世にお前も感謝の祈りをさ

さげなさい」

舞台の上で親子が抱きあつて、わめいたり涙を流しているので、来会者には何のことだかわけが分らなかつたが、やはり感動させられたものと見えて、またもや大拍手が起つた。

治明博士は、その拍手を聞くと、身ぶるいして、正面に向き直つた。

「来会者の皆さま。私は本日、全く予期せざる心霊現象にぶつかりました。それは信じられないほど神秘であり、またおどろくべき明確なる現象であります。ここに並んで立っています者は、私の伴でありますが、この伴は永い間、自分の肉体を、あやしい靈魂に奪われて居りましたが、さつき皆さんが見ておいでに

なる前で、俵の靈魂は、元の肉体へ復歸したのであります。こう申しただけでは、何のことかお分りになりますまいが、これから詳しくお話しいたしましょう……」

とて、博士は改めて、隆夫に関する心霊事件の真相について、初めからの話を語り出したのである。

その夜の来会者は、十二分に満足を得て、散会していった。そして誰もが、心霊というものについて、もつともつと真剣に考え、そして本格的な実験を積みかさねていく必要があると痛感つうかんしたことであった。

隆夫たかおのメモ

呼よびりん鈴が鳴ったので、玄関のしまりをはずして硝子戸ガラスを開いた隆夫の母親は、びつくりさせられた。意外にも、夫と隆夫とが、門灯の光を浴び、にこにこして肩を並べていたからだ。

治明博士は、靴をぬぎながら、さつそく、長いいきさつとその信ずべき根拠について、夫人に語りはじめた。その話は、茶の間へ入って、博士の前におかれた湯呑ゆのみの中の茶が冷えるまでもつづいたが、隆夫の母親には、博士の話すことからの内容が、ちんぷんかんぷんで、さっぱり分からなかった。だが、母親は、今夜の

めでたい出来事が分らないのではなかった。かわいい隆夫が、前の状態から抜けて、元の隆夫に戻っていることを、隆夫の話しぶりや目の動きで、すぐそれと悟った。隆夫が元のように戻ってくれば、それだけで十分であった。どうして隆夫が変わり、どうして隆夫が癒なおったか、そんな理屈りくつはどうでもよかつたのである。夜は更けていたが、親子三人水入らずの祝しゆくが賀の宴もよおがそれから催された。隆夫も、父親治明博士も、母親も、話すことが山のようにあつた。そして時刻の移っていくのが分らなかつた。

電話がかかってくるので、母親は立っていった。そのとき柱時計が午前一時をうった。受話器をはずして返事をする、電話をかけて来たのは三木健みきけんであつた。

「もしもし。こっちは三木ですが、もしやそちらに、隆夫君が帰っていませんかしら」

「えッ、隆夫ですつて。あのウ、少々お待ち下さいまし」

治明博士がすばしこく電話の内容を感じて立って来たので、母親ははつきりした返事をしないで、相手に待ってもらった。替つて、治明博士が電話口に出た。

「隆夫は、こっちに來て居ません。だいぶん以前から、どこかへ行つてしまつて、うちには寄りつかんそうです。どうかしましたか」

と、知らない風を装つた。よそおこれは意地悪ではなく、いじわる当分そうしておくのが、双方のためになると思つたからだ。

三木健の、おどおどした声が、受話器の奥からひびいて来た。

「ぼくは、ほんとに困り切っているのです。とにかく隆夫君はずっとうちに泊っているのです。しかし今夜にかぎって、まだ戻って来ないので心配しているのです。もしや、そちらへ帰ったのではないかと思つたものですから、お電話したんです」

「なんだか事情はよくのみこめませんが、君のご心^{しんろう}労は深く察します。名津子さんは、どうですか。おたつしやですか」

「そのことも、ちよつと心配なんです。今夜姉は卒^{そつとう}倒しましてね、ぼくたちおどろきました。それから姉は、昏^{こんこん}々と睡りつづけているのです。お医者さんも呼びましたが、手当をしても覚^{かくせ}醒^いしないのです。昼間は、たいへん元気でしたがね」

それを聞くと、治明博士はどきりとした。

「卒倒されたというんですか。それは今夜の幾時ごろでしたか」
 「姉が卒倒した時刻は、そうですね、たしか八時半ごろでした」

「今夜の八時半ごろ。なるほど」

「どうかしましたか」

「いや、どうもしません。とにかくそのまま静かに寝かしておいておあげになるがいいでしょう。四五日たてば、きっとよくなるでしょう。多分、今までよりも、もっと元氣におなりでしょう」

電話を切って、茶の間へ戻っていく博士は、

「八時半か。あの時刻にぴったり合うぞ」

と、ひとりごとをくりかえした。午後八時半といえ、隆夫がレザールの前で倒れた時刻だ。隆夫の肉体に宿っていた靈魂第十号が追い出され、そのあとへ隆夫の靈魂が仮りの宿レザールの身体をはなれて飛びこんだその時刻にぴたりと一致する。あの出来ごとが、てきめんに名津子にひびいたとすれば、これは名津子の身の上にも一變化^{ひとへんか}起るのではなからうかと、博士は推理した。博士は、茶の間の自分の座に戻ってから、彼の考えを隆夫と、その母親に説明し、当分の間、隆夫は、この家に居ないことにしておいた方がよいと、結論を述べた。隆夫は、その夜ゆつくりと足を伸ばして睡った。

翌日からは、彼はなつかしい電波小屋にとじ籠^{こも}った。そして多

くの時間を、仮りのベッドの上で昼寝に費し、ときどき起き出でては荒れたままになっている実験装置の部品や結線を整理した。その間に、彼はこれまでの事件についてのメモを書き綴った。

そのメモの中から、少しばかり抜いておこう。

——自分ノ感じデハ、此ノ空間ヲ往来シテイル電波ノ諸相ニツイテノ研究ハ、ホンノ手ガツイタバカリダト思ウ。ワレワレ通信技術者ガワレワレノ組立テタ器械ニヨツテ放出シテイル通信用電波ノ外ニ此ノ空間ニハ現ニ多種多様ナ未知ノ電波ガ飛ビ交ツテイルノダ。ソレヲ探^{たんきゆう}求シツクスコトハ容易デナイト思ウガ、ゼヒトモ速カニソノ研究ニ着手スベキダ。

カカル未知電波ノウチノアルモノハ、時ニ雑^{ざつおん}音トイウ名ノ

モトニワレワレニ知ラレテイル。シカシ果シテソレガ雑音ナド
 トイワレルニ十分ナ屑電波くずでんぱダトスルコトハ早計ニ過ギルト思
 ワレル。雑音コソハ、直チニ研究ニ取懸ルニ適シタ未知電波
 ダ。コレヲ探求シ、分析ぶんせきシ、整頓せいとんシ、再現スルコトニヨツ
 テ、ワレワレハ自然界ノ新シキ神秘ニ触レルコトガ出来ルノデ
 ハナイカト思ウ。

自分ガ関係シタ靈魂第十号モ、カカル雑音ノ中カラ姿ヲ現ワ
 シタノデアル。第十号ハ頗ル野心ニ燃エタ靈魂ダツタ。第十号
 ハ人間界ニ肉迫にくはくシ、ソシテ遂ニ人間ノ靈魂ヲ捉エルニ至ツタ。
 ソノ扱えらバレタル靈魂ノ持主ハ、不運デモアツタガ、又、捉エラ
 レルニ適シタホドノ脆弱ぜいじやくせい性ト不安定トヲ持ツテイタ氣ノ毒

ナ人デアツタ。ソウイウ種類ノ人間ハ、案外身边ニ少ナクナイノデアル。深イ注意ヲモツテカカル人間ニ対シ適當ナ電波的保護ヲ急グノデナケレバ、世ノ中ニハ「手ニオエナイ神経病者」トイワレルモノガ年ト共ニ激増スルデアロウ。

自分ハ健康ヲ回復シタラ、此ノ方面ノ研究ニ没頭シヨウト思ウ。ソシテ、可能ナラバ靈魂第十号ニモウ一度会イ、彼及ビ彼ノ背後ニアル心靈科学ト握手シ、同ジ目的ニ向ツテ協力シタイモノダ。(以下略)

治明博士の予想した如く、一週間後に名津子はすっかり元氣になり、それまでの妖^{あや}しき態度も消え、元の名津子に戻つた。そして隆夫や健^{けん}や^{にのみや}二宮や四^{よつかた}方の交際も旧^{もと}に復した。

なお、隆夫は改めて名津子と結婚した。隆夫の方が年下であることは、二人の間にも親たちの間にも、もはや問題でなかった。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第12巻 超人間X号」三一書房

1990（平成2）年8月15日第1版第1刷発行

底本の親本：「海野十三全集 第七巻」東光出版社

1951（昭和26）年5月5日

入力・tatsuki

校正：原田頌子

2001年11月12日公開

2006年7月31日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.azora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

靈魂第十号の秘密

海野十三

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>